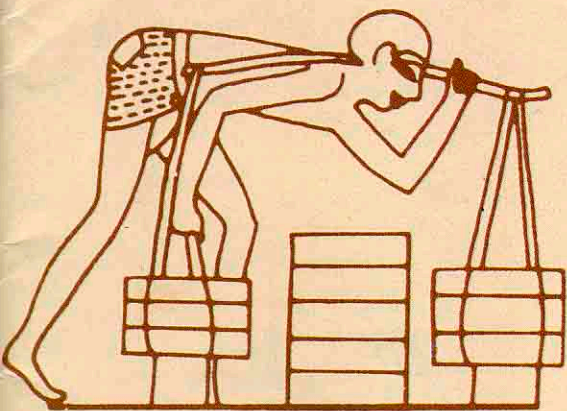
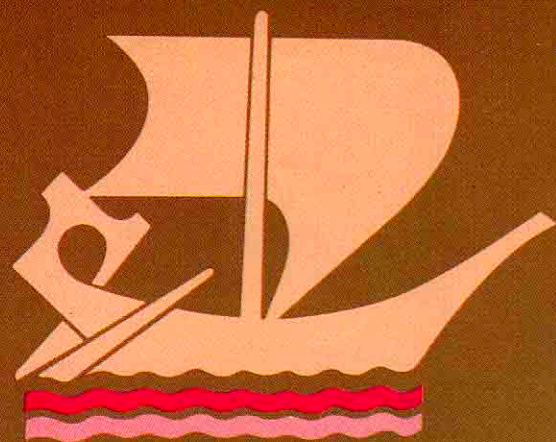




聖徒の道

9 1974



聖餐

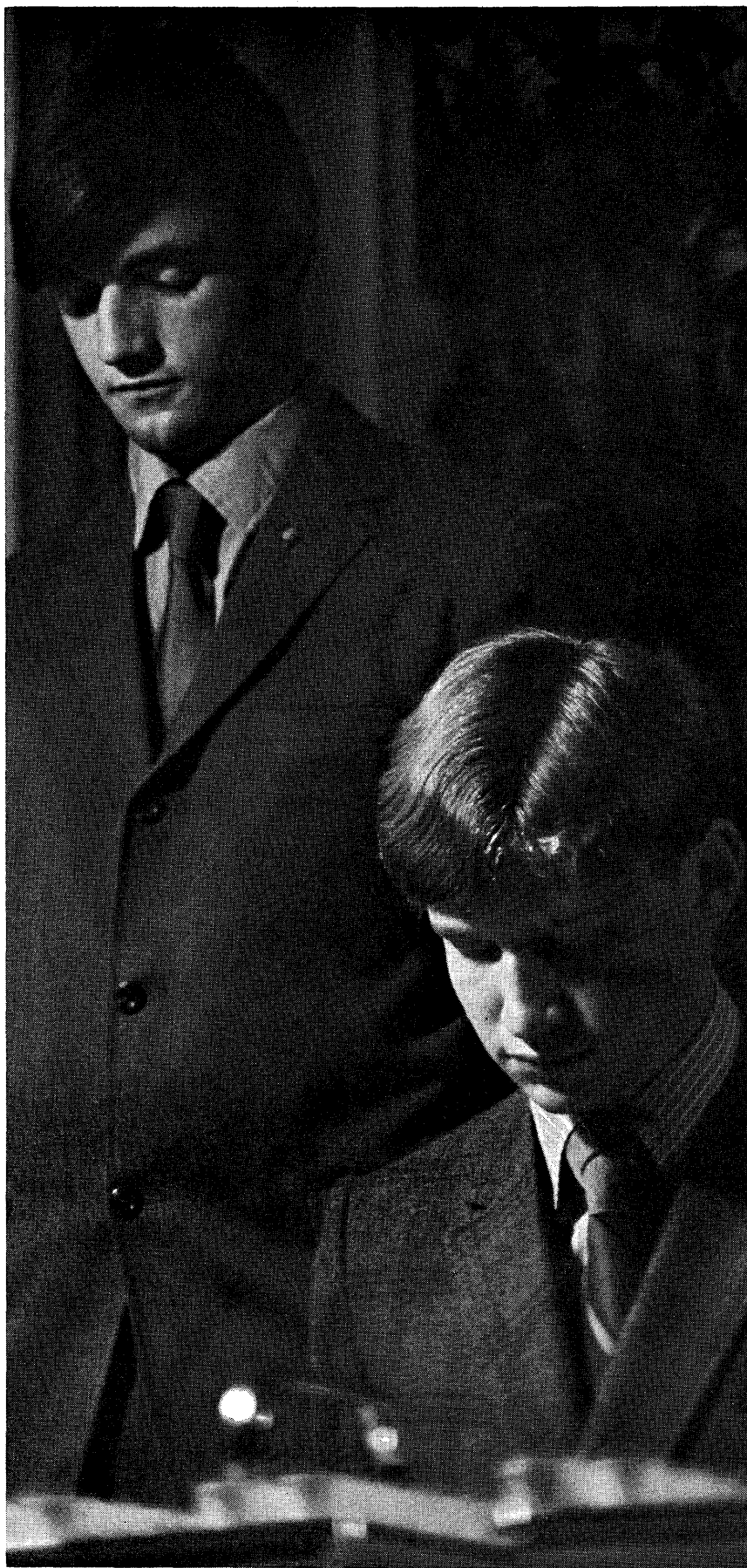
大管長

ジョージ・アルバート・スミス

私たちは聖餐をいただく前に、手も心も清めておかなければならない。友への憎しみを捨て、平安な気持でいなければならない。そして、天父のみこころを行ない、戒めをすべて守ろうという思いを胸に満たしていなければならない。これができれば、聖餐をいただくことによって祝福を受け、私たちは再び霊的な力を受けることができるだろう。

ジョージ・アルバート・スミス
(1870. 4. 4—1951. 4. 4)

第8代大管長



大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バックー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアソン
ジョン・E・カー
ドイル・L・グリーン
ディーン・L・ラーセン
ダニエル・H・ラドロウ
ヴェール・F・スコット

統一機関誌国際編集局

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)

聖徒の道

日本語コーディネーター
八木沼 修

ローカル編集

高木 まりあ

聖徒の道 9月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布 5-8-10

配送 東京ディストリビューション・センター

東京都港区南麻布 5-10-25

定価 年間予約 1,300円 1部 130円

海外予約 1,800円

聖徒の道

1974

9月号

も く じ

心の糧「聖餐」	ジョージ・アルバート・スミス
大管長会メッセージ	386
— すべての事に就きて、主なる汝の神に感謝すべし —	
モーセからマラキに至る歴史展望	389
エドワード・J・ブラント	
ダイジェスト:	
— 出エジプト記からマラキ書まで —	392
文字の起源 第2部	394
ヒュー・ニブレー	
質疑応答	397
リチャード・ロイド・アンダーソン	
イスラエルを奴隷の境涯より	
解放したモーセ	398
シドニー・B・スペリー	
旧約聖書	401
「逸話集、近代の使徒の生涯より」	402
レオン・R・ハートショーン	
— オルソン・F・ホイットニー —	
ノルウェーのお友だち	405
小鳥と少年	406
グムイス・M・プラット	
おもちゃばこ 1	409
小さなお友だちへ	410
スペンサー・W・キンボール	
おもちゃばこ 2	412
質疑応答	413
豊かで満ち足りた人生を計画する	416
スペンサー・W・キンボール	
「汝ら主の器を持つ者よ潔くあれ」	421
マリオン・G・ロムニー	
主に選ばれし者	425
N・エルドン・タナー	
1973年度統計記録	429
ローカルニュース	430

「すべての 事に就きて 主なる 汝の神に 感謝 すべし」

(教義と聖約 59:7)

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

「感謝」という言葉は、「自分が受けた好意に対してありがたく思う気持」と定義されてきている。この気持を忘れる人は立派な人間であるとは言えない。

「キケロは、感謝こそ諸徳の母であり、あらゆる義務の根源であると言った。そして『感謝の心に満ちた(*grateful*)』という言葉と『善良な(*good*)』という言葉、一個の人格にあって一体不離の関係にある同義語として用いている。一ペイト」(*The New Dictionary of Thoughts* 「新思想大辞典」〔英文〕P. 246)

偉大な人はほんの小さな好意に対しても深く感謝する。リバティーの牢獄に捕われていたジョセフ・スミスが、受け取った手紙に対して見せた心の動きに注目してみよう。

「昨晚、手紙を数通受け取った。エマから1通、ドン・カルロス・スミスから1通、それにもう1通はエドワード・パートリッジ監督からである。いずれも心に慰めを与えてくれるものだった。私たちはその思いやりに心から感謝した。何の消息も知らされていなかった私たちにとって、この手紙は、そよ風が心をよみがえらせてくれるような快いものであった。しかし、貧苦にあえぎ、ひどくいためつけられた聖

徒たちの苦難を思うと、その喜びの心にも悲しみの影がさすのだった。私たちの胸が同情の思いではりさけんばかりであり、また私たちの目からは涙がとめどなく流れ落ちているということは、言うに及ぶまい。だが、何らゆえなくして牢獄に幽閉された者でなければ、友からの便りがどれほど懐しいものか知るすべもないだろう。たとえどこから来た手紙であろうと、ひとたび友情の絆が示されると、私たちの心はその友とひとつになるのだ。そして、過ぎ去った者のことが走馬灯のように次から次へと心に浮かんでくる。かと思うと、その絆は稲妻のような早さで現実をとらえ、はたまた猛り狂う虎のような勢いで未来へと広がっていく。いろいろな思いが心の中を縦横にかけめぐり、そして遂には、あらゆる敵意、悪意、憎悪、過去の争い、誤解、不始末が、すべて勝利の希望によってぬぐい去られていくのであった。」(*Documentary History of the Church* 「教会歴史記録」第3巻〔英文〕P. 293)

私たちは、これまで受けたあらゆる好意に対して感謝の気持を持つべきであり、またそれを具体的に表わすべきである。確かに私たちは数知れない好意を受けているはずである。だが、私たちがまず第一に感謝の気持を表わさ

なければならないのは、天父に対してであり、またその御子、主にして贖い主であるイエス・キリストに対してであろう。

詩篇の作者はこう歌う。

「主こそ神であることを知れ……感謝しつつ、その門に入り、ほめたたえつつ、その大庭に入れ。主に感謝し、そのみ名をほめまつれ。」（詩篇 100：3, 4）

またアミュレクはゾーラム人に向かい、「私の愛する兄弟らよ。……神を礼拝し、神が自分たちにたもうた豊かな恵みを毎日感謝してもらいたい」と言った。（アルマ 34：37, 38）

ベンジャミン王も、兄弟たちに向かって次のように言っている。

「……お前たちはどのようにお前たちの天の王に感謝を捧ぐべきであろうか。

全身全霊の力をつくして感謝と讃美とを捧げ、お前たちを造りお前たちを助けてお前たちを養い、お前たちを守りお前たちを喜ばせお前たちが互いに平和に暮らすことを許したもうた神をたたえ……」（モーサヤ 2：19, 20）

主イエスへの私たちの感謝は尽きることを知らない。私たちは、代価を払って買い取られた者だからである。弱い人間である私たちが、十字架上で

耐えられた主のあの苦しみを完全に理解することはできない。ましてや私たちが罪の赦しを受けることができるようにと祈られた、あのゲッセマネでの苦しみも、到底理解することはできないのである。その苦しみを主御自身が次のように述べておられる。「その苦しみたるや、われ神、すなわちすべての中最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ、あらゆる毛の孔より血を湧かせ、身と霊と両つながらを苦しめ、すなわちこの苦さかきより吞まずしてしりごみするも可ならんことを欲したり。」（教義と聖約 19：18）

さらに言うならば、正義の要求を満足させ、罪の赦しの手だてを講ずるために主が耐えられたこの苦しみを理解するのはなおさらむずかしいことである。この苦しみがあつたればこそ、私たちは、主を信ずる信仰と悔改めにより罪の赦しを受けることができるのである。

もし同じ苦しみを受けたとしても、私たちの中に耐えることのできた人はいなかったであろう。いやそれどころか、いかなる人といえども、また束になってかかったとしても、この苦しみに耐えることはできなかったに違いない。

「主のほかに罪を、あがない得ず、天へとわれらに、門あけたもう」
（『末日聖徒讃美歌』No. 82『街をはなれたる青き丘に』）

確かに、救い主が私たちのためになされたみ業を理解する者ならだれでも救い主を愛し、具体的にその感謝の気持を表わしたいと願うはずである。

主は教義と聖約第59章の啓示で、どうしたら私たちが感謝の気持を表わすることができるかを細かく教えておられる。この啓示は、1931年8月7日に、ミズーリ州インデペンデンスで、予言者ジョセフ・スミスが受けたものである。この頃聖徒たちは、ちょうどシオンの地へと集合を開始したばかりであった。その地はすでに奉獻されており、神殿敷地も献納された後であった。

主の啓示は、次のように始まっている。

「誠心を以てわが栄光を仰ぎ見て今この地に集り来れる人々は……幸福なるかな。

然り、その足シオンの地の上に立ち、わが福音に従い居る者は幸福なるかな。その者は報いとして地の善きものを受け、而も地はそれを力強く与えなければなり。

またわが前に忠実にして勤勉な者者は、天より祝福をもて冠を受くべし、

「すべての事に就きて、主なる汝の神に感謝すべし」

また誠に少からざる誠命とその時々に関する啓示とを与えらるるなり。

この故に、われ彼らに一つの誠命を与う。曰く、汝心を尽し、勢力と思いと体力とを尽して主なる汝の神を愛すべし。また、イエス・キリストの名によりて神に仕うべし。

汝己れの如く汝の隣りを愛せよ。汝盗むなかれ。また姦淫を犯すなかれ。また、人を殺すなかれ。また何事にてこれに類することを為すことなかれ。」(教義と聖約59：1，3—6)

また主は、戒めとして次の言葉をつけ加えられた。「すべての事に就きて、主なる汝の神に感謝すべし。」(教義と聖約59：7)

その後、ふたつの戒めが続いている。このふたつの戒めを守るなら、私たちは、主なる神の喜ばれる方法で感謝の気持を表わすことができるであろう。

そのふたつの戒めとは次のようなものである。

第一……「汝誠に真にへりくだりたる心と悔いる精神とを以て、汝の神に義しき捧物となすべし。」

第二……「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様、祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」

それは誠にこの聖日は、汝命ぜられて

働きを休み、いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なればなり。

さりながら汝の誓言は、正しく毎日常に神に捧げられざるべからず。

されどこの主の聖日に於ては、いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉りて、兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。

而して汝この日には他に何事をもなすなかれ。たゞ汝が断食を完からしめんため、言い換うれば汝悦びを以て充されんため、真心をこめてその食物を支度することのみを為すべし。

誠にこれは断食と祈りにして、言を換えて言えば悦びと祈りなり。

而して汝ら感謝と愉快なる心と顔容とを以てこれを為さば、——多く笑いてこれを為すなかれ、そは罪惡なればなり、されば悦ばしき心と愉快なる顔容とを以てなせ、——

われ誠に汝らに告ぐ、汝らこれを為さば地に満つるすべてのものは汝らに与えらるべし。

而して、すべてこれらのものを人に与えたるは神の悦びとするところにして……

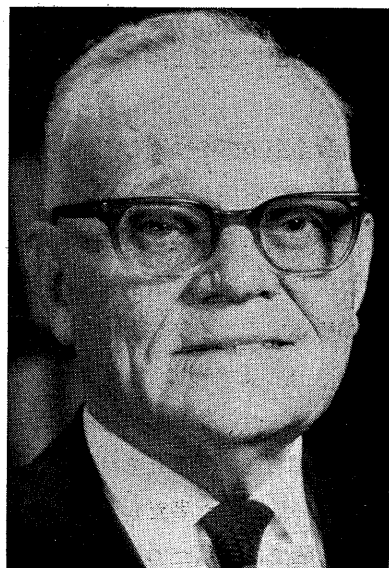
およそ人何事にも神を怒らせずまたは何事にも神の怒り燃ゆることなし、たゞすべての事の中に神の御手のあることを告白せず、その誠命に従わざる

者に神の怒りあり。……

されど汝知るべし。正しき業を行う者はよき報いを得、すなわちこの世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得ん。」(教義と聖約59：8—16，20—23)

私たちに聞く耳があり、主を愛する心があるならば、これらの戒めに耳を傾けるであろう。そして、主の言われた方法でその戒めを守ることにより、主なる神に対する感謝を表わすのである。主はこう言われた。

「汝もしわれを愛すれば、われに仕えわがすべての誠命を守るべきなり。」(教義と聖約42：29)



モーセからマラキに至る

歴史展望

エドワード・J・ブランド

セミナー・インスティテュート管理部

旧約聖書とは何か？ またその内容は？ 大昔の出来事の記録がなぜ今日でも価値があるのか？ 一体、旧約聖書は末日聖徒にとって役立つものなのだろうか？ 多くの人は、その膨大なページ数に圧倒されて、なかなか読破することができずにいる。なるほど、聖書の中に多くの見なれない、名前、律法、慣習を目にすると、旧約聖書は難解だという世評もあながち無理でないと思われる。またある人は、含まれている書の数が多く多岐にわたることから、途方に暮れてしまう。しかし、正しい視点から見ると、旧約聖書は価値のある聖典である。それは創世の時から「時の絶頂」にキリストが降臨する直前に至るまで、神の選民の歴史を次から次へとパノラマのように展開してくれる。聖書には、歴史事項の詳しい年代記こそないが、その代りに、神が人類の行く末ならびにイスラエルの家の歴史上重要な出来事を、見守りたもうことを証している。この記録の目的とするところは、福音の原則と真理およびその誓約を教える物語や証、予言を保持することであった。さて、旧約聖書は、5つの大きな福音の神権時代、言い換えれば啓示と誓約の時代について述べているが、アダム、エノク、ノア、アブラハムの神権時代については、要約された形で記録されており、一部の出来事だけが選択して紹介されている。しかも、これらの神権時代はすべて、創世記の中に記録されている。その80パーセント以上はアブラハムの神権時代ならびにイスラエルの誓約の民が定められたことに関するものである。

残りの部分の9割以上は、第5福音

時代であるモーセの神権時代に関する広範な記述である。この神権時代は、イスラエルの子孫がエジプトで奴隷の身になった時代に始まり、ユダの民が約束の地にあつて、ペルシャ人の属国となるまで続いた。この部分の記録は歴史的見地から大きく9時代に分けられるであろう。そしてどの時期も旧約聖書の一部を構成している。

まず第一がモーセの時代である。出エジプト記から申命記にいたる各書には、モーセの青少年時代の簡単な伝記を初めとし、エジプトにおける寄留から約束の地に入るまでの間にイスラエルの子孫の受けた数々の試練、祝福、あるいは、彼らの示した従順、背反を記録している。この120年の間には、モーセ、アロン、ミリアム、エテロ、ヨシュアが主要人物として登場する。

ほとんどの話の内容は、細にわたってみても、この120年のうちせいぜい4年分程度のものであるが、啓示による誓約、戒め、儀式は広い範囲にわたって列挙されている。主が、その子らをいかに忍耐強く見守りたもうたかということは、当時の聖典の記録の中にはっきり述べられている。主は、子らが主とその予言者に示す忠誠の度合に応じて、神の王国の祝福を与えようとしたのである。

次のヨシュア記には、カナンの地の征服時代のことが記されている。この約20年にわたる記録には、ヨシュアがイスラエル人を率いてヨルダン川を渡る奇跡をあらわしたことや、イスラエルの支族に対するゆずりの地を確保するため数々の戦闘が行なわれたことが記されている。この時代が終りに近づくにつれ、イスラエルの民は主の戒めを安易に解釈して忠実に守らなかったため、自らを背教者の立場に追いやることになった。

第3は士師の時代であるが、これは士師記に要約された形で述べられている。この何千年かの間にイスラエル人は主にそむいたので、単独で約束の地に定着するに当たって、主の助けを続けて得ることができなくなった。(士師記2:20-23)、そのころイスラエルには王も予言者もいなかったので、「人々はおのおの自分たちの目に正しいと思うことを行なった。」(士師記17:6; 21:25)

この期間に、主は事情に応じ、また人々の必要に応じてしばしば人を士師に召し、支族内の問題解決に当たらせたまうた。ところが権力と自分の利益を目当てに、人々を裁く地位につこうとしたものも少なくなかった。ある者はその支族の指導者であり、またある

者はいくつかの支族を包含する地域の支配者であった。

名前のあげられた15人の士師のうち、その士師としての働きを一部でも書きつづられた者は8人だけである。デボラとギデオンは人々を助けるため召された義人の例である。アビメレクの話は、不義の者が権力を追い求めた顛末を描いている。また、サムソンの話は主に対する献身的な信仰の例である一方、せっかく与えられた機会を義しく生かし得なかった例でもある。また、この時代にはルツが登場する。彼女はモアブの出身の熱心な改宗者であったが、ダビデの父方の祖母であり、イエス・キリストの直系の先祖でもあった。

士師の時代は、祭司であり士師であったエリに関する記述と、全イスラエルの祭司、士師、そして予言者に立てられたサムエルの記述をもって、サムエル記上の初めの方の章で終わっている。当時の人々は神の王国を神が示された様式に従って受け入れることを喜ばなかった。そして長い間待ち望んでいた予言者を拒み、世の国々と同じ慣習に基づいて王を求めたのであった。

サムエル記上の残りの部分はモーセの神権時代の第4の時期、すなわちサウルの治世を詳しく述べている。40年にわたってイスラエルを統治したこの初代の王の物語は、はじめは謙遜な僕であったのが、王位につくと高慢で嫉妬深く、王位をないがしろにしたために主にみはなされた話である。このあと、もうひとり油を注がれて王になったダビデの話が記されている。彼が信仰の覇者としてゴリアテを倒したと、またヨナタンとの真の兄弟愛は、聖書の中でも有名な物語となっている。

サムエル記下は次の時期、すなわちダビデの治世の記録である。彼は族長として7年間ユダの民を治め、全イスラエルの支持を得て、主の民に君臨する2代目の王となった。ダビデは国を統一し、エルサレムをイスラエル国の大都とした。しかし権勢が絶頂に達したとき、彼は誘惑と情欲に負け、遂にバテシバとの事件で殺人を犯すまでに至った。また、予言者ナタンの予言通り、彼の家族の中にも悲劇が相次いだ。最終的には贖われるという希望を残しながらも、表面的な栄光とは裏腹に個人的な悲劇を背負ったダビデの治世は、その幕を閉じたのであった。

イスラエルはダビデの息子ソロモンの統治のもとに黄金時代を迎える。次の書はそのことを述べている。列王紀上の前半には、ソロモンの成功と失敗が若干記されている。彼はイスラエル最初の神殿を建て、主に献堂した。また、イスラエルが諸国の中の強国として繁栄をもたらすにつれ、精美をこらした宮殿、政府庁舎、要塞も建てられた。

貿易と経済の中心地となったイスラエルは、一方では富を蓄積できたが、他方では、外国の影響をまともに受けることとなった。外交上の譲歩や王族間の婚姻を仲介とした条約は、主の恵みを受けられずに最終的には国の分裂と国民の墮落をもたらす種をまいていたのであった。

ソロモンの死後、王国分裂時代が始まった。列王紀上の後半および列王紀下の全書は分裂国家が次第に没落していく有様を記録している。ユダの支族とその地域に住んで吸収同化されていたシメオン人と、ベニヤミン部族の半

分が統合され、ユダの王国と呼ばれる南王朝ができた。そして北方にあった残りの十支族と他の一支族の半数はイスラエルと称する王国を建てた。この王国はまた、その中で指導権を握っていた支族の名をとってエフライム王国と呼ばれることもある。

この時代の聖書の記録は歴史の流れをたどっていくのがなかなか容易ではない。それは一つの国について述べはじめたかと思うとすぐほかの国のことを述べるという風で焦点が定まらないからである。また时期的なずれも生じている。これは、ほんの数人の王の生涯に起こった重要な出来事が、このふたつの書に記されているからである。北のイスラエル王国の錯綜した年代記は2世紀にわたり、数ヶ月から40年に及ぶ期間、統治した20名を記録している。そのうち、ヤラバアム、アハブ、エヒウ、ホセアが最も有名な王である。



主がこの国に立てたもうた予言者には、エリヤ（エライジャ）、エリシャ、アモス、ホセアがいる。この国民は建国から滅亡に至るまで、偶像崇拜をことし、退廃的であった。また絶えず姉妹国ユダまたは近隣の諸国と戦争をしていた。紀元前722年、反抗的なイスラエルも遂にアッシリヤ人の手により征服され、戦いは終結した。そのアッシリヤ人は北王国のほとんど全部を捕虜として本国へ連れ去った。後に彼らは捕囚の束縛から逃れ、地図にもものっていない地域へ移動し、その行方がわからなくなっている。そこで彼らは「失われた支族」と呼ばれるようになった。

これに比べて、南のユダ王国は21名の王の統治の下に、約3世紀半も続いた。ユダの最初の王位についたのは、ソロモンの息子レハベアムであり、その後続いた王のうち、アサ、ヨシャパテ、ウジヤ、ヒゼキヤ、ヨシヤ、ゼデ

キヤなどがよく知られている。また予言者ヨエル、イザヤ、ミカ、エレミヤ等はユダにあって主に聖別された主の代表者であった。

悪の双壁である偶像崇拜と不道徳は、南部王国をも同じく没落に導いた。しかし、中には義しい道をわきまえた、力強い指導者と言える王もいた。彼らは反乱を予知して機先を制したり、また若干の改革を行うことにも成功した。紀元前587年、ゼデキヤ王の治世に、ユダの民の邪悪は頂点に達し、遂にエルサレムの崩壊を招いた。このため、民はバビロニア人の捕虜となったのであった。

注：歴代史上、下は、サムエル記上、下および列王紀上、下に記載されている内容と大部分対応するが、一部補足する役割も果たしている。

ユダ王国の民の、北方、バビロンへの移動を契機として、モーセの神権時代第8期またはユダの流浪が始まった。この時代の聖典の記録ははなはだ不完全なため、予言者エゼキエルならびにその後の王妃エステルの記録を通じてのみ、彼らの捕囚の身の上について部分的に知ることができるだけである。

その後、ユダはバビロンの手を離れてペルシャの隷属下に入った。ペルシャ王のクロスがユダの民を約束の地へ帰還させるよう宣言したときをもって、旧約聖書の物語の最後の章が始まる。記録係であったエズラの書ならびに民の選ばれた総督であったネヘミヤの書は、この民の帰還実現に払われた苦労が描かれている。

予言者ハガイと、ゼカリヤに助けられ、国民は初めに神殿を建て直し、引

き続きエルサレムの再建と聖地の回復とに努めた。聖典に記されているユダの民の最終年代は最後の予言者であったマラキの警告をもってその巻を閉じている。そのマラキは、昔の予言者たちが先祖に伝えたメッセージを繰り返して告げた。しかし背教にむしばまれたユダの民は、救い主が降臨するまで心をかたくなにしたままであった。

モーセの神権時代はほとんど千年の間続いた。この時代がモーセの名にちなんで名づけられた理由は、この民に対する神の啓示された誓約と律法が、モーセを通して下されたものだからである。モーセは当時イスラエルをキリストのもとへ導く行ないと儀式の「養育掛」であった。イスラエルは主に背いたので、律法のもたらす祝福と恩恵を刈り取ることができなかった。彼らのいくたの経験と予言者たちの啓示によるメッセージは、真のそして義しい原則の重要性を今なお証している。

旧約聖書の価値について示現で教えを受けたニーファイは、こう書いた。『『この書物はユダヤ人から出たものである』と仰せになって、私にその書物が出てくるところが見えた。天使はなおも『汝の今見る書物は主がイスラエルの家に立てたもう誓約と、聖い予言者たちの語った多くの予言とをのせているユダヤ人の記録であるが、それは真鍮版に刻んである歴史に似た記録であって、ただ真鍮版に比べてその数が少いだけである。それでもその中には主がイスラエルの家に立てたもうた誓約がのせてあるから、異邦人にとってたいそうねうちのあるものである』と仰せになった……』。(I ニーファイ 13:23)



出エジプト記からマラキ書まで

出エジプト記からマラキ書まで

出エジプト記は、エジプトの地において捕われの身にあったイスラエルの人々が、束縛から解放され、シナイにたどり着くまでの経過を記したものである。またそれと共に、1年半にわたったシナイ滞在中の出来事も幾つか記録されている。この時代、エホバによって、諸々の律法、儀式、神権が明らかにされ、運搬のできる神殿すなわち幕屋が建造された。

レビ記には、イスラエルの人々に対する法規範（宗教および民事上）、神権の権能により執行される儀式、慣習、指示が記録されている。「モーセの律法」に関して捧げ物や祭の制度が確立したことも説明されている。

民数記は、シナイからカナンの地に至るイスラエルの人々の旅の様子が記されている唯一の記録である。旅の仕度や編成があらかた記され、約束の地への旅の様子が詳しく述べられている。カナンの地の国境で謀反を起こした結果、イスラエルの民は40年の歳月、荒野でさまようことを余儀なくされた。この出来事については簡単にしか触れられていない。この書は、イスラエルの人々がついにヨルダン川までたどり着き、まさに約束の地に足を踏み入れんとしているところで終わっている。

申命記は「第二の律法」であり、モーセが人々に与えた最後の説教を含む。また、過去40年間にわたる歴史の幾ばくかに触れ、数々の律法、戒め、祭りごと、儀式を再度取りあげ、

イスラエルの将来にかかわる予言の言葉も記録されている。

ヨシュア記は、ヨシュアの時代にその全土が領土としてイスラエルの民に保証されはしなかったものの、カナンの地を征服したことを語る。それから約束の地カナンがイスラエルの各支族に受け継ぎの地として分け与えられたことが述べられ、ヨシュアが人々に与えた最後の教えと警告で結ばれている。

士師記は、ヨシュアの死後サムエル誕生のときまでのわずかしかなかった歴史上の出来事の記録をまとめたものである。ルツ記も同じ時代に書かれたが、これは例外と言えよう。この時代、イスラエルは、歴然と背教への道を歩んでいる。

ルツ記は、士師記の書かれた時代に起きたモアブの女性の改宗談を記録したものである。

サムエル記上はサムエルの誕生に始まり、サムエルがイスラエルの人々の間でなした働きが述べられている。また、イスラエル初代の王の位にあったサウルと彼の生涯に起きた出来事が、若者ダビデにまつわる出来事をはじめとしてサウルの死に至るまでを含め、この書に見いだされる。

サムエル記下は、世を去るまで王の位にあったダビデの統治

を取り扱っている。イスラエルの予言者（サムエル、ナタン、ガド）のなした働きに関しても触れている。

詩篇は、ほとんどダビデの作であり、だれかが編集したものと思われる。多くはダビデの統治、その時代の歴史にかかわるものである。

列王紀上は、ダビデ王の死に続いて、彼の息子ソロモンの統治に触れている。ソロモンの統治時代、主の神殿が建造され奉獻された。彼の死後、支族と指導者の間に紛争が起こり、その結果王国はイスラエル王国とユダ王国の二国家に分裂してしまったのである。記録はさらに両国家における王の交代に触れ、断片的な記事が続く。数多くの予言者が登場してくるが、中でも特にエリヤ（エライジャ）を取りあげている。この書は、イスラエル王国に君臨していた王アハブ一族の支配の途中で終わっている。

箴言は、編集面で他の著者の名があげられているが、ほとんどはソロモンの作だとされている。俗に「知恵文学」と言われ、啓示よりも実際の、実証的な事柄が記されている。

列王紀下には、イスラエル王国すなわち北の支族がアッシリアの手により滅ぼされていくまでの分裂国家の様子が記されている。記録はさらにエルサレムの陥落とバビロンに滅ぼされたユダ王国の捕囚へと続く。この時代の予言者については、著名な予言者エリヤ（エライジャ）とエリシャが述べられているにすぎない。

注：旧約聖書の中で以下の書——ヨエル、ヨナ、ホセア、イザヤ、ミカ、ナホム、ゼパニヤ、ハバクク、オバデヤ、エレミヤ——は、紀元前 850 年から紀元前 587 年にかけて、イスラエルとユダの民の間で生活し働いた予言者たちの記録であり、主に予言と各予言者の教えが含まれている。予言者のなした働きについて一部分しか記されていないものが多いが、歴史上の事柄や物語が含まれているものもある。

歴代志上、下は、天地創造の時代にさかのぼり、捕囚の身から解放されてユダの地に帰るまでのイスラエルの民の歴史が簡潔に記されている。記録の一部は概略や系図そのものであり、ほかの部分はサムエル記下と列王紀上、下に類似、あるいは補足する記事が載っている。

注：ネブカデネザルの時代、すなわち最初のエルサレムの捕囚があった当時（597 B. C.），ネブカデネザルはユダの王エ

ホヤキンの治世に、エホヤキンと数十万のユダの民を国外に連れ去った。（列王下24：10—16） そのとき捕われの身となった人々の中に、エゼキエルと恐らくダニエルもいたと思われる。ふたりは、ユダが異郷の地バビロンに捕われていた間、偉大な指導者であった。

エゼキエル書は主として、イスラエルがバビロンに捕囚されてから紀元前 587 年に滅亡するまでの間、エゼキエルに与えられた予言を記録したものである。それと共に、祖国から連れ去られて異郷に暮らした人々の日常生活も記録されている。

ダニエル書は、ダニエルおよびダニエルと交流のあった人々の生涯に起きた数々の出来事の叙述である。またダニエルの予言も幾つか含まれている。

エステル記は一般に、ユダが捕われの身にあった後期、あるいは多数の人々がエルサレムに帰還した後に、ペルシャで起きた出来事であろうとされている。

エズラ記は、クロスの治世に束縛から解放されたユダの民の記録である。この時代、神殿が再建され、エズラは人々を組織し援助する権能を授けられた。

ネヘミヤ記は、エズラ記に引き続いて書き継がれた記録である。ネヘミヤは権限を受けてエルサレム城壁の再建を指揮し、その事業は完成した。また、彼は人々の中にあって一連の改革をも指導したのである。

ハガイ書、ゼカリヤ書は、神殿再建の期間中エズラを支えたものである。これらの書き物は、歴史や教え、予言が組み合わさっている。

マラキ書は、ネヘミヤの後を継いだこの予言者手ずからの著作である。マラキは迫り来る背教に力を尽くして抗し、ユダの人々の中で予言をしたり旧約時代最後の予言者である。



文字の起源

ヒュー・ニブレー

第2部

諸々の帝国の建設は、文字を書く技術があって可能となった。というのは、筆記した文書があつてはじめて距離という障害を克服し、統治者の言葉と權威を、視界の届かない、丘を越えた地域に及ぼすことができたからである。時間は記憶を薄れさせるが、書き物は王の命令や判決の言葉を無制限に何年も保存する。⁴² 王は帝国を統治するに当って、神の仲介者であり書記であると自称した。⁴³

エジプトでは、「神の書物を納めた家の主人」が「天の記録保管所にある真実の記録」⁴⁴ にパロの王家の名前を書かなければ、そのパロは統治することを許されなかった。この記録保管所は、エジプトでは生命の家と呼ばれ、^{いのち}万物の命の行方を握る文書が納められていた。⁴⁵

初期のユダヤ教徒やキリスト教徒の間の伝承、あるいはもっと古い他の伝承の中で、天の書が出てくる所では、王、祭司、仲介者がどこでも天界の書記として登場している。⁴⁶ パロは第一に「神の書を知っている者であり、また神の書の所有者」⁴⁷ であった。エジ

プトの神トトと同じように、バビロニアの神であり予言者兼書記であったナブも、地上で起こるすべてのことを定める運命の「不変の平板」^{タフレット}に万事を書き記したのであった。⁴⁸ 地上の出来事が天上の出来事とつじつまが合うようにするために、すべてのことが書かれた。

事ごとにこの書がひもとかれた。「あなたの前を歩んだ父祖のことを書き、写せ。……見よ、彼らの言葉は記録されて文書になっている。本を開いて読み、また書写せよ。」⁴⁹ おもしろいことに、すべての文書の中でも最も重要なものは、系図の記録であった。そして生命の家は、正に系図の記録を保管する所であつて、それ以外のものではなかった。ガーディナーは、あの偉大なピラミッドそのものも王家の系図上の記録を納めるために築かれたものであると結論づけている。⁵⁰

書物を写したり研究したりする生命の家は、太初から大学に非常に類似した場所であつた。⁵¹ ここですべての学問上の疑問が解決したからである。⁵² 生命の家は常に神殿の一部に設けられ、諸々の書には太古の詩が載っていた。……エジプトの神殿参拝に欠かせない役割を果たした詩人の仕事は、明けの明星と共に創造の歌を歌うことであつた。⁵³ 当然のことながら讃美歌は音楽に合わせて歌われた。それで一部の学者は、最初の文字は楽譜からきたものだとも主張している。⁵⁴ 讃美歌は神聖な仲間間で歌われた。すなわちコーラスで歌われた。このようにして、詩、音楽、舞踊が神殿で始まり、世界に広まっていったのである。

創造の讃美歌は、毎年神殿で上演された壮大な演劇の一部であつた。祭儀

的な運動競技によって、人類の墮落と贖いが表現された。この競技で勝った覇者は、祭司であり王であつた。そしてこのときに勝者の戴冠式と結婚式が行なわれた。これが政府の始まる源であり、政府の中心であつた。

この催しにはすべての人種が参加するように求められていたので、遠方の各地から持ち寄った品々が忙しく交換された。いろいろな形の富を、神殿が受領できる捧げ物に変える必要があつたことから銀行と両替の機能を果たす業者が現われた。

神殿は天文台として存在するようになり、あらゆる事柄が暦と天体に結びつけられたことから、数学が隆盛をきわめ、天文学は花形の学問であつた。宗教上の諸儀式は、生者のためだけでなく死者のためのものでもあつたので、歴史も花形であつた。この世を去った偉人のために記念碑を造ることから、肖像画、彫像、絵画の技術が進歩した。神殿の建物は宇宙の尺度のひな型であつて、その設計と測量は極めて重要な事柄であつた。そこで神殿の建築は人々の最大の関心事となつた。また神殿の中心点から全地が測量され、分配されたので、地理学は必須の学問であつた。「はじめにひとりの神がホルスに、エジプトの地を受け継ぎの地としてあなたに与えようと約束された。これは万物の主の命令により、書物に書き記された。…土地を分割するにあたっては、文書によって布告された。」⁵⁵

生命の家で書かれ写された書物は、同じく生命の家で討論され、哲学の開始を見たが、その内容は主として宇宙論と自然科学の分野であつた。要約すれば、現在の文明の中で神殿に起源を持たない分野は全くないと言える。こ

れは全く文字の力のおかげなのである。

しかし、文字の本当の起源は、ジークフリート・ショットが指摘するように、今後長い間、あるいは多分永遠に推測の域を出ないに違いない。⁵⁶ それでもすべての学者がただ推測しているにすぎないということを知って懸念を抱く必要はない。なぜならどんな学問も推測し、討論することによってはじめて進歩していくからである。

私たちが弁解じみた断りもせず展開した論旨の口火もここにあった。万事が極めて不確定であり、言及されていない事柄について言うべきことがたくさんあるからである。学者たちが全く活路を見いだすことができずに行き詰まっているのは、証拠が欠如しているためである。そこで学者はすべての証拠を考察しようと試みるであろう、しかもそのとき自然科学に含まれないものについても取り上げるだろう、と人は考える。他の道がすべてふさがっていれば、無視されている道を一部切り開いて、今だかつて問われなかった質問をするのが賢明な方法である。考えられるものをあげてみよう。

1. 文字の面でも進化論が成立するという説には、大きな考え方のギャップがあるが、これをどう説明すればよいのだろうか。絵からアルファベットの使用に移行したことを示す実例はどこにあるのだろうか。

2. 突然象形文字が出現し、続いてセム語系のアルファベットが出現したことについてはどうだろうか。いずれも登場したときすでに完全に発達したアルファベットであった。これらの文字が人の発明したものであり、天才の作であることは一般に認められてい

て、しかも進化説を裏づける証拠が存在しないのに、なぜ長期にわたる遅々とした、偶然の所産であり、無意識のうちに作られた文字の進化過程を仮定しなければならないのだろうか。

3. 最古の文字は、文字について語る最古の伝説と深い関係がある。普通の好奇心に富んだ学者ならそういった伝説を調べるように提案しないだろうか。アルファベットの起源は、フェニキヤ人に発しているとするギリシャの伝説が忠実であることを否定する学者はいない。では他の諸伝説も真剣に吟味して、少なくとも新しい事実が現われるまで、取り組むべきではないだろうか。

4. なぜ古代の人たちは、口をそろえてアルファベットを含めた文字の起源が天にある、と言っているのだろうか。

5. なぜ太古の記録文書は皆共通して神殿で発見されるのだろうか。また必ず宗教上の事柄を記しているのはなぜだろうか。

6. 読み書きはなぜいつも天の意志を解釈することと結びついているのだろうか。

7. 「文字の本質には、何か驚異的なもの、神秘的なものが伴っていて、絶えず思慮ある人々の心を強力に引きつけていた。」ゼーテはこう書いている。ではゼーテはなぜ、無意識の中に「機械的な」操作の所産である最初の真実の文字が、「ごく取るに足りないつまらないことしか伝えていない」と主張するのだろうか。それほど「驚異的なししかも神秘的なもの」が、ごくつまらない目的のために、平凡な過程で発明されたのだろうか。

8. 書き記された象徴に超自然的な

力があると信じる信仰は極めて古く、矢印の発明の時代にさかのぼる。太古の文字が人と獣の上にふるまった奇跡的な、あるいは不思議な力を考慮しないで、初期の文字の本質を認識できるだろうか。⁵⁷

9. 最初の文字は、エジプトの第一王朝の確立と共に、完全に発達した形で出現した。しかも、ショットによれば、およそ進化したとは言えないほど発達し、矛盾のない姿をとっていた。統治と権勢の道具に欠くことのできない「王の秘密」としての文字の意義はどこにあるのだろうか。

10. なぜ文字はいつも神秘であり、一部の人の間にしかわからない秘密であり、王や祭司の独占物なのだろうか。「文字が果たす本当に驚異的な役割、すなわち思想を刺激し、保存し、伝達することは……実務家には全く興味のないことであった。書記や商人は、取引の記録、個人的な手紙、学校の宿題等を無期限に保存し、際限なく伝えていっても何の意味もないものであると考え、定期的に廃棄した。」⁵⁸ ではなぜこのような書記や商人が文字を発明したと言われるのだろうか。

以上の10の質問をあげれば、私達の推論を正当化することができよう。エジプト人は文字の中に絵を持ち込んだので本当のアルファベットを持っているなかったと主張する人々は、エジプト人が、望むときには絵を除外することができたし事実何度も除外していることを無視しているようである。エジプト語を話すエジプト人にとって、アルファベットがあればそれで十分であった。ちょうど子音文字だけでセム系の言語が十分読めるのと同じである。もし一歩譲って他の記号が必要であった

としても、なぜ不便な絵文字や音節文字がすすんで、経済的で効率のよいアルファベットの使用をささげなければならぬというのだろうか。

象形文字（「聖刻文字」）を使用した人々は、その当時の同国人を対象に書いただけでなく、他の人々をも読者に考慮していたと私は申し上げたい。例えば多くの初期の副葬品は、まだ生まれていない遠い未来の世代に語りかけられている。表意文字、すなわち絵がなくとも、学識のあるエジプトの書記は、当時それを読むことができた。しかし今日私たちはその絵がなければエジプト語が決してわからないのである。

もしエジプト語が複合性を持っていることから全く独特な言語であるとするなら、エジプト語の意図するところも独特なものであろう。すなわち、他のどの言語よりも広く人々に伝達できるという点においてである。この理論を支持する証拠は数多くあるが、ここにそれをあげることはできない。恐らくエジプト人は、終極的にメッセージが理解されるようにするため、意識的に十分すぎるほどの資料を私たちに残したのであろう。

エジプト語に起源を有し、西洋世界全体に使用されたセム語系のアルファベットについて言えば、きわめて驚くべきことに、聖典を、しかもほかでもない私たちの聖典を記録するというただひとつの目的のために、発明されたと思われる。ゼーテは、モーセがセム語のアルファベットを発明したのかも知れない、と述べている。ゼーテはその考えを支持するため、ユーポレモスというユダヤ人の言葉を引用している。同時にユダヤ人の伝統に圧倒的に通じた権威者によれば、モーセでなくアブ

ラハムがアルファベットの発明者であるとしており、一部の人はアブラハムはエノクから引き継いだとしていることを付記しよう。

近年数々の新しいアルファベットが近東で発見されている。いずれも紀元前2,000—1,500年のもので、「明らかに個人が発明したものである」⁵⁹ 個人が発明することがあっておかしいだろうか。ひとたび発明できることがわかれば、自分のアルファベットを作るのは全く自由である。近代でもアルファベットが発明されて重宝されている例が幾つもある。しかし、最も古いものはカナン^{トラー}のアルファベットであり、「律法が古代に起源を有することを明らかにする証人」⁶⁰ である。一部の人は、象形文字に匹敵するくらい古い、あるいは、それ以上に古いと考えている。⁶¹

この状況を慎重に考察した結果、聖典を決して軽んじてはならないと言うことができよう。どの宗教も信じていない、従って何ら宗教の抱束を受けていないことを誇りにしている学者が、聖典の中に、なにかずく私のたち聖典の中に文字の起源を真剣に探っていることは、注目に値することである。今日標準聖典を読む者は誰でも、時の初めから記された神の言葉を前にしているのである。聖典は今日まで発見されたものの中でも、文字の起源に迫る最短距離の研究資料を提供しており、最良の手がかりを与えているのである。

脚 注

42. A・モレ、「オリエント史」（パリ、大学出版部、1944年）、I、96以下
43. ピラミッド・テキスト、第309—490
44. A・モレ、「パロの王位」（パリ、1902年）

P.102

45. W・バルタ、定期刊行物「エジプト語」97（1971年）、P.7
46. H・ツィメルン、「楔形文字と旧約聖書」（ベルリン、1903年）、P.43
47. ピラミッド・テキスト、第167d.
48. B・マイセネル、「パピロニアとアッシリア」（ハイデルベルク、1927年）、II、125
49. A・ガーディナー、「エジプト考古学ジャーナル」1（1914年）P.25
50. A・ガーディナー、同上誌11：4
51. S・ショット、ゼーテの「絵から文字へ」（1964年）のあとがき、P.71
52. A・ガーディナー、「エジプト考古学ジャーナル」、24：158、174以下
53. W・オットー、「詩歌」^{ミューゼン}（ダルムシュタット学術書籍協会、1961年）
54. F・M・ハイシュエッタイム、題銘学、An. 刈、1—4（1950年）、p.111—15
55. S・ショット、セツに対する勝利、P.16
56. S・ショット、歴史と古代学の研究、vol. xii（ヒルデシャイム：G・オルムス、1964年）、P.83
57. 西部政治季刊誌2（1943年）p.329—39「矢、狩人そして国家」で詳しく紹介した。インブループメント・エラ56（1953年）p.90—91、150—2、191—5、150、266 tにも掲載した。
58. インブループメント・エラ、58（1955年5月）p.307—8からの引用
59. A・ジルク、「ドイツ東洋学協会誌」100：520
60. H・トル・シナイ、「ユダヤ季刊レビュー」41：296
61. P・モルデイト、「ユダヤ季刊レビュー」2：575

*ニブレー博士がこの記事の中で神殿と呼んでいるものは、主の神殿ではなく、異教の神殿である。ニブレー博士は、古代の人々のすべての伝統が、文字が天から与えられた賜であることを実例をもって示している。例えば、エジプト人は誤った神々を拝んでいたが、彼らの文字に関する言い伝えは真理に基づいていた。アダムも他の人々もみたまの靈感によって書いたからである。（モーセ6：5—8参照）

質 疑 応 答

救い主は旧約聖書のどの書を最も多く引用しておられますか。

解答／

リチャード・ロイド・アンダーソン

山上の垂訓の例に見られるように、主は旧約聖書を活用する能力も、超越する能力も卓越したものを持っておられました。「律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように」（マタイ7：29）話されましたが、決して「律法や預言者を廃するためにきた」

（マタイ5：17）のではない、と主張されました。

イエスが旧約聖書を学び始められたのは、今の子供が幼稚園に行く年頃のことでした。12歳のときにユダヤ教の博士たちと聖書について驚くべき明晰さをもって討論し、成人してからは旧約聖書からの引用や先例をふんだんに駆使して話をされました。私たちが手にしている簡単な福音書には、旧約聖書からの引用が約75箇所ありますが、これはユダヤ人の聖書の内容と権威を尊重しておられたことを示しています。主は各書に精通し、ほとんどすべての書を活用されました。

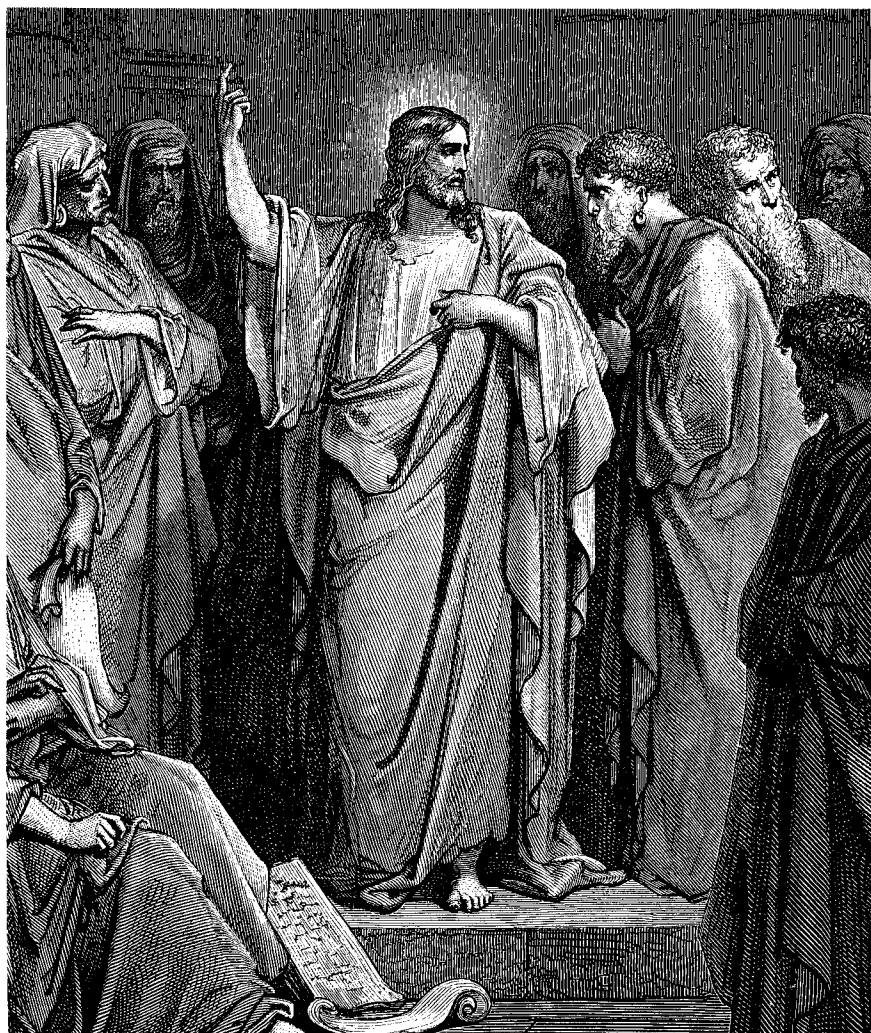
きわめて当然のことながら、イエスはモーセの五書を最もよく引用されました。この初めの五書は律法であった

ことから、問題は五書にもどるとき最も強力な権威をもって解決したのでした。イエスの聖句引用の約4分の1は、この五書からでした。イエスはまた同じくらいの頻度で詩篇から引用されました。この敬虔な詩を集めた文書から大いなる慰めと予言の言葉を見いだされたからです。引用された予言者の中ではイザヤが最も多く、12回以上直接引用しておられます。多くの詩篇の言葉と同じく、メシヤについて予告したイザヤの予言も主の心を引きました。地上に降臨したイエスは、イザヤの言葉を自分に当てはめて、これらの予言は成就したと宣言されました。（ルカ4：21）。復活後もイエスは、「モーセやすべての預言者」からはじめて「ご自身についてしるしてある事ども」を説きあかされました。（ルカ24：27）

歴史はイエスが五書、詩篇、イザヤ書を強調されたことを支持しています。死海写本の発見は、クムランの人々が保存していた写本の数から判断して、当時旧約聖書のうち上記の各書が好んで読まれていたことを証明しています。このような情報は末日聖徒にとって、特に興味があるに違いありません。なぜならモルモン経が他のどの予言者よりもイザヤをよく引用しており、救い主が「イザヤの言葉は、まことに偉大なる価値あり」（Ⅲ ニーファイ23：1）と強調されたことを知っているからです。

イエスの引用の中で約4分の1は、ダニエル書と小予言者から取られています。イエスはメシヤ、個人の義、背教、回復そして末日の審判に関する予言を選ばれました。救い主に従う人はイエスと同様、旧約聖書の中に教訓と靈感、予言の言葉を見いだすに違いありません。

リチャード・ロイド・アンダーソンは、ブリガムヤング大学の歴史学と古代の聖典学の教授である。





イスラエルを 奴隷の境涯より 解放した

モーセ

シドニー・B・スペリー

モーセは人類に恩恵をもたらした偉大な人物の中でも傑出した存在である。古代のヘブライ人は、予言者、聖見者の中でモーセを最大の人物として敬っていた。末日聖徒も十分な理由をもって、モーセの果たした役割と業績をきわめて高く評価している。

モーセとその兄アロンは、立派な両親のもとに生まれている。彼らの父母は、アムラムとヨケベデで、ヤコブの3番目の息子レビの子孫であった。(出エジプト6:16, 18, 20) 従ってモーセとアロンはレビ人であった。後年レビ族に属する人々は、祭司の職について主に仕えるよう特に選ばれている。(民数8:5-26参照)

レビの部族は祭司の部族として知られ、ヘブル人の中で霊的な活動の大部分を指導していた。モーセの生涯は、それぞれ40年の歳月からなる3つの時期に分けることができるだろう。すなわち、(1)エジプト時代、(2)砂漠時代、あるいは霊的準備の時代、(3)イスラエルの指導者、立法者の時代である。

エジプト時代に起こった出来事は、出エジプト記2章の最初の15節に、簡単にまとめられている。そこでモーセは、自分の誕生とパロの娘との逸話、パロの娘に引き取られたこと、そしてエジプトびとの工事監督を殺したことを語っている。

残念ながらモーセはエジプトの宮廷生活で経験したことを何ひとつ説明していない。恐らく彼は当時のエジプトの教育

を余すところなく受け、外交術策にも通じていたと思われる。ユダヤ人の歴史家ヨセフスの著述を信頼するなら、エジプト人は、モーセが宮廷内にいる間、彼の指導力を存分に活用したのであった。

モーセはエジプトからミデヤンに逃れる前に結婚していたのだろうか。これは興味ある質問である。答えは恐らく然りであろう。その根拠としては、まず第一に、若い男性にとって結婚することは、特別な義務と考えられていたことがあげられる。結婚しないでいることは、人類殺害の従犯となることであった。第二は、「モーセはクシの女をめとっていたが、そのクシの女をめとったゆえをもって、ミリアムとアロンはモーセを非難した」(民数12:1)とあるからである。この結婚はモーセがエジプトの宮廷にいたときに行なわれたものであろう。

エジプトの工事監督を殺したモーセ(出エジプト2:11, 12)は、パロの怒りから逃れなければならなかった。そこで今日アカバ湾と呼ばれる海の東岸にあるミデヤンの放牧地に身をかくした。(出エジプト2:15) 未来の立法者が民を救い出すために霊的な備えを始めたのは、この地であった。

モーセの正義と公平を愛する心は、井戸のそばにすわっていたときの出来事によく現われている。ミデヤンの7人の娘が父の羊の群れに水を飲ませようとしたとき、羊飼たちがき

て彼女たちを追い払った。しかし、「モーセは立ち上がって彼女たちを助け、その羊の群れに水を飲ませた」（出エジプト 2：17）のであった。このように娘たちの権利を擁護したので、彼はミデヤンの祭司エテロの家族の一員となった。（出エジプト 2：18—22）ここでモーセはエテロの娘チッポラと結婚し、ゲルショムとエレアザルのふたりの息子を得た。モーセはエテロの羊の群れを飼う者となって、荒野を彷徨し、放牧に適した所を捜さなければならなかった。

エテロはモーセの生涯と業績に非常に大きな影響を与えている。旧約聖書はエテロを「ミデヤンの祭司」と呼んでいるが、ジョセフ・スミスを通して与えられた近代の啓示は、エテロの神権に明るい光を投じている。教義と聖約84章によれば、モーセは「妻の父なるエツロ（エテロ）の手より……聖なる神権」を受けたのである。（教義と聖約84：6）このことからエテロは大祭司の職にあって、ミデヤンで教会の支部を管理していたと信じることができる。（靈感訳出 エジプト 18：1 参照）

古代ヘブル人から最も偉大な予言者

と敬われていたモーセは、

主から、イスラエルを奴隷の境涯から解放し、
後にジョセフ・スミスに導きを与えるという
驚くべき任務をまかされた。

エテロの神権がカレブとエリフを通してメルケゼデクとノアに達し、続いてアダムにさかのぼることは注目に値する事実である。（教義と聖約 84：7—16）彼がメルケゼデク神権を持っていたという事実から、私たちはミデヤンにイエス・キリストの教会があったと信じるものである。これは驚くべきことである。この当時旧約聖書は教会について何も述べていないからである。しかし、幸いジョセフ・スミスのおかげで、エテロが聖典を持っていて、モーセが家族の一員となったとき彼に福音を教えたと考えることができる。

モーセがイエス・キリストの教会の会員になったという考えは、私たちと信仰を異にする教会外の人々にとって、異端思想であると思われるかもしれない。しかし福音を知っている者には、理にかなった結論である。もっともこの考えに対して、次のような興味ある質問が生じるであろう。いつだれが福音をミデヤンの人々に伝え、教会がそこに設立されるに至ったのだろうか。モーセがイスラエル人を奴隷の境遇から救い出し、荒野時代どのようにして教会全体（ミデヤン以外にも支部があったと仮定して）を管理したのだろうか。

以上の質問について考えると、メルケゼデクがアブラハ

ムの時代に教会を管理し、什分の一をアブラハムから受け取ったことを銘記すべきである。（創世 14：20 参照）モルモン経（I ニーファイ 17：35）は、パレスチナで福音が説かれたが、大部分の者が拒んだことを示している。従って、神の教えを宣べ伝える者たちは、モーセがミデヤンで発見したもの以外にも各地に支部を築くことができたと考えることができよう。

エテロがモーセを教え導いた霊的な訓練は相当なものであったにちがいない。その結果ついには主御自身が直接モーセを教え、予言者の職に召されるに至ったのである。モーセはエテロの羊の群れを西の方、荒野の中へ、「神の山ホレブ」へ連れて行ったようである。（出エジプト 3：1）ここで主は燃えるしばの中からモーセに現われ、エジプトに行つて主の民を奴隷の境涯から救い出すように命じられた。

その出来事のあった直後に、主はモーセを「いと高き山」に導き、彼と「顔を合わせて」語られた。（モーセ 1：1, 2）モーセのこの山上での経験は驚くべきものであり、私たちはこれを決してないがしろにすることはできないだろう。

人が神と顔と顔を合わせて話すことができることは、モーセだけでなく、ジェレドの兄弟など他の人々も証明している。（イテル 3：6—28 参照）主が顔と顔を合わせて語られた以上、これらの人々は並はずれて高い霊性を持っていたにちがいない。主は直接モーセに会われただけでなく、モーセを「わが子」と呼び（モーセ 1：4）、主の手に成る工の多くを示された。（モーセ 1：4—5）またモーセに「汝はわが生みたる独子の生写しなり。わが生みたる独り子に今も将来も救い主とならん。……」と言われた。（モーセ 1：6）主はモーセにこの世と「創らるるすべての人の子らと嘗て創られしすべての人の子ら」を見せられた。モーセが「いたく驚き怪し」んだのも無理からぬことであった。（モーセ 1：8）

主はそのときしばらくの間モーセの所から離れ去られた。すると偉大な立法者は力尽きて地に倒れ伏した。モーセは神のみ前にあって人は無に等しいことを認め、神を見たのは肉眼ではなく、霊の眼で見たのであると言っている。もし肉眼で見たのであれば、モーセは神のみ前にあって枯れしほみ、死んでいたことであろう。

次にモーセは、自分を拝ませようとするサタンと戦うことになった。モーセはルシフェルを認め、独り子のみ名によって退けと命じた。（モーセ 1：12—22）

神の栄光が戻ったとき、主はモーセに、あなたは多くの海よりも強くなり、イスラエル人を束縛より解放放つだろう、と言われた。（モーセ 1：25, 26）次にモーセはみたまによって地とこの世に住むすべての人々、そして陸と呼ばれる多

くの土地を見ることをゆるされた。(モーセ 1 : 28, 29) モーセはこれらのものを見、どうしてこれらのものを造られたのですかと主に説明を求めた。そこで、神が神の独り子によって無数の世界を創られたことを知らされたが、主はこの世とそこに住む民について簡単に話されただけであった。

そのあとで、モーセは神のみ業の目的をはっきり示された。「見よ、これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ 1 : 39) これは非常に重要な聖句である。

この節は、他のどの聖句にも優って、子らに対する主の愛をよく説明している。

モーセの求めに応じて(モーセ 1 : 36) 主はこの地とその民に関することを説明された。(モーセ 1 : 40, 41) さらにモーセは主が語られたことを書き記すように命じられた。

モーセの生涯の第3の時代は、イスラエルの指導者、立法者として働いた時期であった。ミデヤンでの類まれな霊的経験に強められ、備えられて、モーセはエテロに別れを告げ、妻子と共に、主から求められたとおりエジプトへ帰って行った。そして途中で、主に命じられて出てきたアロンの出迎えを受けた。モーセは自分の代りに語るアロンに主の言葉を告げた。そしてエジプトに着くとモーセとアロンは、イスラエルの長老を集めて民に関して告げられた主のメッセージを伝えた。民はふたりの言葉に非常に感動し、伏して礼拝した。(出エジプト 4 : 10—31参照)

イスラエル人を奴隷の状態から解放するようパロを説得するにあたって、モーセとアロンが起こした力強い奇跡と不思議な業はあまりにもよく知られているので、ここで繰り返す必要はないであろう。ただ一言つけ加えるなら、エジプト人の長子が死ぬに及んでパロはイスラエル人が家畜と共にエジプトを去ることに同意したが(出エジプト 12 : 30—33)、イスラエル人が完全に自由に逃れることができたのは、エジプト人の軍勢が紅海で滅んでからであった。イスラエル人はそこで「主とそのしもべモーセとを信じた」(出エジプト 14 : 31)と伝えられている。

荒野に入るとモーセは、イスラエル人の霊的な姿勢を根本から変える必要があることを悟った。あまりにも長い間エジプト人と異教徒の宗教とその慣習に接してきたので、腐敗してしまっていたからであった。(金の子牛を造った話が出エジプト 32 : 2—9に出ている) 主はモーセに、民に次のように言えと命じられた。

「それで、もしあなたがたが、まことにわたしの声に従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所

有だからである。あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう。」(出エジプト 19 : 5, 6)

イスラエル人は十戒と他の教えを受けたとき、宗教の基本を教えられたのであった。一部の人々は疑いもなく教会に加入したが、多くの人が加わらなかったことも明らかである。またふさわしくないとみなされていた人もあったにちがいない。(Iコリント 10 : 1—8, 教義と聖約 84 : 24) しばらくして少なくとも一部の者に、福音の一層高い儀式がモーセによって明らかにされた。

もしイスラエル人が、モーセの望んだように一致して教会に加入していれば、世界の歴史は大幅に書き換えられていたであろう。しかし、残念ながらその民は「その心を頑固にした」(教義と聖約 84 : 24) のであった。民が金の子牛を拜んだ後、主はモーセを民の中から取りあげ、聖なる大神権をも取り上げられた。そして小神権だけ残された。

よく知られているように、モーセはカナンに入ることを主からゆるされなかった。しかしモーセは荒野で死んだのではなかった。予言者エリヤ(エライジャ)と共に変貌の山でペテロ、ヤコブ、ヨハネに現われたことからわかるように(マタイ 17章参照)、主によって身を変えられたのである。モーセとエリヤ(エライジャ)は、それぞれ持っていた権能の鍵を3人の使徒に授けたが、そうするためには、ふたりは骨肉の体を持っていなければならなかった。この場合、ふたりは変えられた身体を持っていたのであった。(「予言者ジョセフ・スミスの教え」[英文] P. 158)

モーセもエリヤ(エライジャ)もキリストの復活のとき共に復活にあずかった。(教義と聖約 133 : 55) 恐らく瞬く間に、身を変えられた状態から復活した状態に変えられたのであろう。

モーセは1836年4月3日カートランド神殿で予言者ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに姿を現わしている。これはこの神権時代における最も重要な顕現である。教義と聖約 110 : 11には次のように記されている。「……モーセわれらの前に現われ、世界の四隅よりするイスラエル人の集合と北の国より十の支族を導き来ることの鍵をわれらに委せり。」

今の神権時代と昔の神権時代におけるモーセの働きを考えると、私たちは次の聖句を思い起こすことであろう。すなわち、「イスラエルには、こののちモーセのような預言者は起らなかった。モーセは主が顔を合わせて知られた者であった。……」(申命 34 : 10)

スペリー博士は、元ブリガムヤング大学宗教部部長で、現在退官している。BYU第8ステーク部の祝福師である。

旧約聖書

1975—76年度（日曜学校福音の教義クラス）の旧約聖書学習コースの読書課程は、以下の通りです。

課	タイトル	読書課程	
1.	イスラエルを率いるモーセの召し	出エジプト1—6 特に3, 4	21. 聖なるものを軽んじない サムエル上4—7
2.	奴隷のかせをはずす	出エジプト7—12	22. 主は心を見られる サムエル上16
3.	奇蹟の神	出エジプト13—16	23. ダビデとサウル：その生涯 サムエル上16—31
4.	人格者、モーセ	出エジプト16, 17	24. ダビデとヨナタン：真の友情の価値 サムエル上18—20, 23
5.	教会と家庭の秩序	出エジプト18, 19	25. 誘惑に立ち向かう サムエル下1—12
6.	十戒	出エジプト20—24, 申命5	26. 神殿：イスラエルの礼拝の中心 列王上1—11
7.	安息日：契約のしるし	出エジプト25—31	27. テシベびとエリヤ（エライジャ） 列王上16—22, 列王下1, 2
8.	イスラエルに対する神の契約	出エジプト32—40	28. ヨブ：苦難の中の信仰 ヨブ
9.	レビ記：偉大な養育掛	レビ15—26	29. 復活の約束 ヨブ14：14, 19：25—27
10.	神は荒野で民に備えをさせた	民数1—15	30. 主はわたしの光 詩篇2, 8, 23, 27, 73, 84, 118, 121, 145—50
11.	バラムの滅亡	民数22—36, 特に22—24	31. 神より授かる知恵の賜 箴言1—4, 6, 8—10, 16
12.	従順によって成長する	申命1：1—4：43	32. 永遠の価値あるものを求める 伝道
13.	愛は律法を満たす	申命4：44—28：68	33. 主に学ぶヨナ ヨナ
14.	健康に関する主の律法	申命14：レビ10, 11	34. ヨエルとミカの予言 ヨエル, ミカ
15.	契約を結ぶ民	申命29—34	35. イザヤとメシヤ イザヤ6, 7, 9, 11, 40, 52, 53
16.	エリコの陥落	ヨシュア1—9	36. イザヤと末の日 イザヤ1—5, 10, 11, 29, 49, 52, 65：17—25
17.	シケムでの誓約	ヨシュア10—12, 24	37. 弟子であることにより払う犠牲 エレミヤ1—20
18.	約束の子、サムソン	士師1—16	38. 新しくかつ永遠の誓約 エレミヤ21—45
19.	ルツとボアズ：無私的愛	ルツ1—4	39. 主に立ち帰り、生きる エゼキエル
20.	サムエルの召し	サムエル上1—3	40. 見守る者の責任 エゼキエル3：17—21, 33—48
			41. 信仰の人、ダニエル ダニエル1—12
			42. 従順によって得る一致と力 エズラ, ネヘミヤ
			43. エステルと家族 エステル1—10
			44. 啓示の窓 マラキ

これを機会に、旧約聖書を新たな観点から学ぼうにしましょう。

「逸話集、近代の使徒の生涯より」

※レオン・R・ハートション編「逸話集、近代の使徒の生涯より」(*Exceptional Stories From the Lives of Our Apostles*) ソルトレークシティー、デゼレト出版社、1973年、許可を得て転載。

オルソン・F・ホイットニー

略歴

ホイットニー長老は、1855年7月1日ユタ州ソルトレークシティーで、ホレス・キンボール・ホイットニーとヘレン・マー・キンボールの間に誕生。

ソルトレークの学校とデゼレト大学で学ぶ。のちにユタ大学総長となる。

ヨーロッパで3度伝道したが、3度目のときには伝道部長として伝道部を管理した。

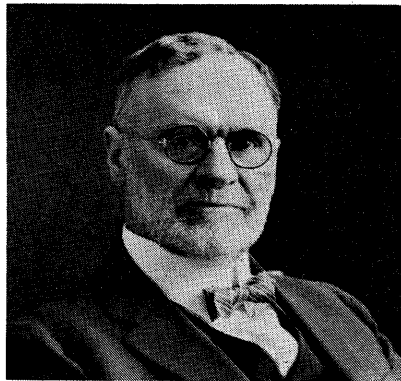
24年間ソルトレークシティーの第18ワード部監督として働き、その後十二使徒に召される。

聖任は1906年4月9日、ジョセフ・F・スミスによってなされた。55歳のときである。ホイットニー長老はユタ州ローガンのブリガム・ヤング・カレッジで教え、ヒーバー・C・キンボールとロレンゾ・スノーの伝記を著わした。

数ある著作の中でも傑出するのはユタ州史である。彼は卓越した演説家、有名な著述家であった。自作の詩を朗読しては聴衆を魅了したが、青年時代には演劇に深い関心を持ち、「ホームドラマ劇団」で主演したり、歌を歌い、政治活動にも参加した。

1931年5月16日、ユタ州ソルトレークシティーで心臓発作のため死亡。

これらの物語はホイットニー長老の回顧録からの引用である。



「それはあなた

しだいである」

そのとき、より高い源からの驚くべき顕現、訓戒、無視するのも不可能なことがやってきた。ペンシルベニア州ラシカスター郡のコロンビアという小さな町で私がベッドに横になっていたときのことで、それは夢か、そうでなければ夢の中での示現だった。私はゲッセマネの園にいて、苦肉する救い主を目撃していたのだと思う。私は人を見ると同じにはっきりと、救い主を見た。私が前方の木の陰に立っていると、イエスがペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴い、私の右手の小門をくぐって来られるのが見えた。神の御子は3人の使徒をそこに残し、ひざまずき祈るように言ってから、園の反対側へ行き

ひざまずいて祈られた。聖書を読む者ならばだれでも知っている、あの祈りだった。「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままではなく、みこころのままになさって下さい」と。

祈っている間、こちらを向いている救い主の頬には涙が流れ落ちた。私はその光景に感動し、純粋な同情の気持から自分も泣いた。心はすっかり救い主に注がれ、私は魂のすべてをこめて救い主を愛し、ほかの何もいらない、ただ救い主のそばにいたいと切望した。

ほどなく救い主は立ち上がり、使徒たちがひざまずいていた所へ行かれた。すると、何と彼らはぐっすり寝入っていた。救い主は彼らを静かに揺すって起こし、少しも怒りやいらだちを見せずに穏やかな調子でたしなめ、たった1時間も一緒に目をさましていられなかったのかと、悲しげに尋ねられた。救い主が世の罪の耐えがたいほどの重みを双肩に担い、すべての男女子供が受けるべき苦しみとその鋭敏な心を射し貫かれていたというのに、使徒たちはものの1時間も一緒に目をさましていられなかったのだ。

救い主はもといた場所へ戻り、前と同じ祈りを捧げてから、使徒たちの所へ帰ってみると、またも彼らは眠っていた。救い主は今度も彼らを起こし、再びたしなめてからもう一度戻って祈られた。これが3回も続いて、私は救い主の表情や姿や動作などをつぶさに見る事ができた。救い主は堂々たる

たく
体軀と威厳ある風貌で、ある画家たちが描いたようなめめしくひよわな方ではまったくなく、幼な子のように柔和で謙遜な、まさに神たるお方であられた。

と突然、状況はそのまま、あたりの雰囲気が変わったような気がした。先刻と違い、十字架にかけられた後で、救い主は3人の使徒と一緒に私の左手に立っておられた。彼らは今にも天に昇って行くところだった。私はもうこらえきれずに木の陰から飛び出して、救い主の足元にひれ伏し、ひざを抱きしめ、どうか一緒に連れて行って下さいと嘆願したのである。

救い主はかがんで私を起こし、腕に抱きしめて下さったが、その穏やかな優しいしぐさを決して忘れることができない。それは実に鮮やかに、はっきりと私の胸に焼きついている。救い主の腕に抱かれると体のぬくもりを感じた。救い主はこの上なくやさしい口調で、「いや、息子よ。これらの者はその業を終えて、わたしと共に行くことができる。しかしあなたはここにどまり、あなたの業を終えなくてはならない」と言われた。私はそれでも救い主にしっかりと取りすがっていた。私は救い主のお顔を見上げ——というのも主は私よりも背が高かったから一、必死の思いで哀願した。「ではどうぞ、いつかみ前に行けるとお言葉を下さい。」すると救い主はやさしくほほえみながら、「それはあなたしだいである」と言われた。自分のむせび泣きで目がさめると、朝だった。

私がこの見聞きしたことをマッサー長老に話すと、彼は「それは神から来たものだ」と言った。私は、「まったくその通りです」と返事した。私はその教訓をはっきり悟っていた。自分が

使徒になるとか教会の別の役職を得るとかはまるで考えたこともないし、現にそんなことはない。だが、あの眠っていた使徒の姿が自分にとって何を意味するのかを私は知ったのだった。私は自分の職にありながら眠っていた。神から何かの任を受けながら別のことをしている人と同じに。

しかし、そのときからすべては変わった。以来私は二度と再びあのような人間にはならなかった。

「祈っています、 と返事をした」

ある朝、私はいつもの論説を書こうとしたが、いっこうに筆が進まない。読み甲斐のある記事をと苦心さんたんだのだが、遂に丸一日を棒に振ってしまった。筆を投げ出すと、腹立たしさに涙がこぼれた。

ちょうどそのとき、みたまがささやいた。「祈ってはどうか？」

まるで本当の声がしたようで、私は「祈っています」と返事をした。私の祈りは朝、昼、晩の自分だけの祈りとあとは家族と一緒に朝食、夕食の祈りで、いつもは1日5回だった。「祈っています。どうして助けがないんですか」と、やりきれなさにさじを投げようとしていた私は、ほぼすてばちの気持で聞いていた。

「今、祈りなさい。」みたまは言った。「望むところを求めなさい。」その意味がわかった。必要なのはい

つもの祈りではなく、特別な祈りだったのだ。私はひざまずいて、涙ながらにふたことみこと祈った。十支族の帰還や新エルサレムの建設を祈ったのではない。論説が書けるように助けたまえと、イエス・キリストのみ名により主に願ったのだ。私はそれから立ち上がり、椅子にすわって、書き始めた。すると頭はすっきりときえて、筆は流れるように紙の上をすべった。書き出すや、すぐに必要なことが全部頭に浮かんで、考えや言葉がそれぞれぴちっと適格な場所に決まった。またたく間に充分満足できる論説がまとまった。それを伝道部長に読んで聞かせると、一カ所の訂正もなく承認された。

私はそこから教訓を得た。と言うよりも、すでに知ってはいたものの特に必要なことを、この出来事は思い出させてくれたのである。祈りは単なる言葉でもなければ決まりきった文句を並べるものでもない。祈りは「魂の切なる望み」であり、主が「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」と言われたのは、ほかでもない、そのような祈りだったのだ。

「彼はどの子が死んだ と言っていなかった」

その間、別の苦難が私と家族を見舞っていた。ロンドン近郊に初めて記念すべき第一歩を記したその日に、まだ幼ない息子のヒーバー・キンボール・ホイットニーが、遠いユタ州スムート

の祖父の家で死んだのだ。この子は私が英国に出発してから7カ月と21日後に生まれており、これまで顔を見たことがなく、結局この世で会うことはできなくなった。

その悲しい通知は、記事をデゼレト・ニューズで読んだりバプールのジョン・ヘンリー・スミス伝道部長からの悔み状で知らされた。その後、ユタ州プロボの義理の父から知らせが来て、それが確認された。なお痛ましいことには、自分自身の病気や母親の死という辛い状況の中で、今度生まれて来る子供こそ傷ついた霊をいやす永遠の慰めとなってくれるだろうと一縷の望みを託していたのに、それもはかない夢と消えてしまったのだった。

私はできるだけ気持を押えて、失意の妻に愛と同情の手紙をしたためた。結びにはこう書いた。

「君からの手紙を待ちかねている。しかし、もっと悪い知らせが来はしまいかと、手紙を受け取るのが恐ろしい。神が君を慰めたもうように。今の君には慰めが必要に違いないと思うから。」

スミス伝道部長が最初に知らせて下さった。しかし、彼はどの子が死んだと言っていなかったのだから、君からあの子が重体だと聞いていたからあの子に違いないと思いながらも、もどかしい数時間だった。

伝道部長は、私を解任しようと言って下さった。伝道部長御自身の祝福も携えて行きなさいと言っておられる。彼はこの国の主の代表者なのだから、その通りにすべきかと考える。君はどう考えるだろうか。5月出帆のグループには間に合わないが、6月にはこちらを発てる。もし君がそうしてほしいと言うなら、そして主の命令がそれと

変わらなければ、私はそちらへ行こう。」

「火の海の中でも」

(オハイオ州) クリーブランドで最近知り合った人々の中に、非常に立派な婦人がいた。南北戦争で戦死した北軍将校の未亡人で、死に別れた夫を愛し、夫の思い出を心に温め、深い愛情が言葉の端々ににじみ出していた。私が彼女に死者の救いと永遠の結婚の教義を説明して、末日聖徒はそのような目的のために神殿を建て、儀式を行なうのだと話すと、彼女は非常な関心を持ち、このような鋭い質問をしてきた。

「もし私が末日聖徒になったら、愛する夫のためにその儀式をしていたら、別の世でも夫婦になれるとおっしゃるのですか。」

私は「はい」と答えた。

すると彼女は言った。「こんなに美しく、尊いお話は聞いたことがありません。どうぞ、それを私に悟らせて下さい。そうしたらバプテスマを受けましょう。たとえ火の海の中でも。」

私はそれに答えて言った。「私には悟らせる力はありません。しかしあなたが求めれば、主が悟らせて下さいます。」

彼女は求めてみますと言った。そして求めたに違いない。それからまもなく、彼女から手紙が来た。そこには、求めていた証が得られたので、バプテスマを受ける用意ができたと書いてあ

った。

私はすぐに、数名の参加者を募り、時間と場所を決めて、エリー湖の岸辺でおちあい、そこでバプテスマを施すことにしますと、書き送った。同行者が決まり、さあ出かけようという段になって、また彼女から手紙が届いた。このように書いてあった。「自分がこんなに弱くてもろい人間だとは知りませんでした。自分では足を踏み出す勇氣があると思っていましたのに、そうではありませんでした。私が『モルモン』になったら、友人のみんなに見放され、社会的な立場を失い、名前は忌み嫌われることでしょう。その犠牲が払えないのです。でも私は、この教えが真実であること、あなたが神様の本当のしもべであることを信じております。いつか私たちが、同じ場所に立って、キリストの教会の兄弟姉妹となれるときが来ることを願っております。ただ、今はそれができないのです。」

文面を読みながら、気の毒さと残念さが入りまじった気持だった。性急な使徒ペテロに何と似ていることか。ペテロは救い主に「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」と言いながら、そう誓った聖なるお方を3度も知らないと言った。この善良な婦人は——実際善良な女性だった。絶対にイスラエルの子孫だ。そうでなければどうして信じたのだ——

「たとえ火の海の中でも」バプテスマを受けたいと思っていた。それが、誘惑がやってくると自分の弱いことを知ったという。彼女が、後悔して立派にその埋め合わせをしたペテロのように、これから戻ってきて改心するように、希望を持つのではないか。……

ノルウェーのお友だち

ノルウェーの海岸はフィヨルドと呼ばれ、湾の両岸の切り立つがけの下には、まっ青な水をまんまとたたえています。ちょうど今から千百年ほど前のこと、この国にはバイキングという海ぞくが住んでいました。そしてこの海岸から、いつも洋々とした海原に向けて船を出していました。今でも、ノルウェーの漁師たちは同じ海に出て行って漁をし、世界有数の漁獲高をほこっています。

ノルウェーの北部一帯は、「真夜中の太陽の国」として知られ、5月から7月にかけては1日中太陽が沈みません。そして南の方では白夜が続きます。しかし冬になると、太陽は昼間でもほんのわずか、そう、2、3時間ぐらしか顔を見せなくなります。

バイキングの国ノルウェーは、山が多く、細長い形をした美しい国です。比較的暖かい北海に面した南部から、北は寒い北極圏にまでのびています。

ノルウェーの冬は長いうえに雪がたくさん降るので、人々は外で遊ぶことが大好きです。ですから何百年も前からスキーがさかんで、今ではノルウェーの国技になっています。どこに行ってもスキー用のジャンプ台が見られるほどです。また、クロス・カンントリーというスポーツもさかんです。

そのほか冬のスポーツとして、アイス・スケートも人気があります。また、1チーム11人の選手によって競うバンディというアイス・ホッケーもあります。

夏にはサッカーがさかんに行なわれます。またこの季節には海岸ぞいを船でめぐる人も多く、たくさんの川や湖は魚つりを楽しむ人でにぎわいます。また、各所にボートクラブがあります。

子供たちは、「麦刈り」というゲームをして遊びます。これは奇数の子供が集まってする遊びで、日本の「かごめ、かごめ」とよくにています。

さて、みなさんは、エドワード・グリーグ(1843—1907)という作曲家や、劇作家のヘンリック・イプセン(1826—1906)、また探検家のローアル・アムンゼン(1872—1928)の名前を知っているでしょう。この人たちはみなノルウェーで生まれました。またトール・ヘイエルダールもこの国に生



まれました。彼は5人の仲間といっしょにコンチキ号といういかだに乗って、南太平洋を7千キロも旅した人です。そして、ポリネシアの人々をはるか以前に、ペルーから移ってきたということを証明しました。

ノルウェーの首都オスロは、ノルウェー南東の低地にあります。この一帯はたくさんの川が流れていて、人々はこの川をいろいろに利用しています。たとえば、川の流れを利用して山から切り出した木材を製材所まで送ったり、水力発電の電力源にしたりしているのです。

紀元998年に築かれたトロンヘイムは、以前ノルウェーの首都だったところですが、トロンヘイムの町は、広大な平坦地がいくつもある「中央トロンヘイム低地」にあり、農業がさかんです。しかし最近では、ノルウェーの工業、貿易の中心地として脚光を浴びるようになってきました。

詩人のサイモン・O・ウォルフ(1796—1859)は、祖国ノルウェーを次のようにうたっています。「わが祖国は栄あるかな、いにしえより伝わりしけわしきがけ、うるわしき夏の谷間、いてつく冬の日々。いかにこの地がゆれ動くとも、はげしきあらしが吹きすさぶとも、わが祖国の山は動かしがたし。」

お話：グレイス・M・プラット

写真：エルドン・リンショッテン

小鳥と少年

新聞配達の少年が、自転車で走ってきました。ふと、道のまんなかに小鳥が一羽じっとしているのが目に入りました。「あぶない！」少年はあわててハンドルをきりました。「ここは君がねるような所じゃないよ。」少年はふりかえってこう言くと、また走っていきました。

しばらくして少年は配達を終え、小鳥のいたところへもどってきました。どうしたのでしょうか、小鳥はまだそこにうずくまっています。

少年は小鳥を見ました。小鳥も小さなつぶらな目で少年を見ました。でも動きませんでした。

「ねえ、君、どうしたの。」少年は言いました。そして自転車をおりて小鳥に近づきました。小鳥はにげようとしたが、とぶことができませんでした。

少年は小鳥に近よりながら言いました。「ねえ、どうしたの。君のなかまは、とくに目をさまして、えさをさがしに行ったよ。こんなところにうずくまっているのは君だけだよ。」

少年はゆっくりと小鳥に近づき手をのばしてつかまえようとししました。小鳥はおどろいて空へまいあがろうとししましたが、少年の頭くらいの高さにまいあがただけで、また地面に落ちてしまいました。

少年は両手をおおせて小鳥をつかまえました。

小鳥はくるったように少年の指にかみつきました。「あい

たっ！」少年は小鳥をはなしそうになりました。「こわがなくていいんだよ、ね。」いたさをこらえながら少年はやさしく小鳥をなでてやりました。

「病気なのかい。血は出ていないよ。ネコにやられたのも、てっぼうでうたれたのでもないね。」少年は小鳥のからだをしらべました。

そして、やさしく言いました。「こんどはつばさと足だよ。いたくないからね。」

少年はそっと小鳥のつばさをひろげてみました。足もしらべました。

もう小さな小鳥はあばれませんでした。からだがよわっているのでしょうか。それとも少年をすっかりしんらいしているのでしょうか。

「うーん。どこもほねはおれていないようだねえ。こまったなあ、けがじゃないとすると、病気なのかなあ。」

少年は小鳥のくちばしのさきからしっぽのさきまで、ちゅういぶかくしらべました。どこもほねはおれていないようだね。こまったなあ、けがじゃないとすると、病気なのかなあ。

少年は小鳥のくちばしのさきからしっぽのさきまで、ちゅういぶかくしらべました。どこもわるいところはないようです。それから少年はのどから胃のあたりまで、指でさぐってみました。

「あれっ、おなかがからっぽじゃないか。どうしたんだい



何も食べてないのかい。かわいそうに。」

少年は小鳥の目を見ました。小鳥も少年の目を見ました。「ぼくがどうしたのかわかったでしょ。」小鳥の目はそう言っていました。少年の目はじっと小鳥の目を見つめていました。目から目へ、心から心へ何かがかよいあいました。少年はやさしく小鳥をなでてやりました。小鳥は少年の手のひらにじずかに横になりました。と、そのとき、小鳥は口からぶくぶくとあわをふきだしたのです。

「ああ……、毒をのんじゃったんだね。くるしいだろう。メイヤーのときもそうだったよ、ぼくの犬の……」

少年は上をむいてぎゅっと目をつぶると、ぐくんとつばをのみこみました。そしてまた小鳥を見て、こう言いました。「もうすぐメイヤーに会えるよ。いいやつなんだ、ちゅうくらしいの、ちゃ色のむく犬なんだよ。あいつ小鳥がすきだからきつといい友だちになってくれるよ。」

少年は道ばたにこしをおろして、やさしく小鳥の羽をなでてやりながら、ずっと小鳥にはなしかけていました。

小さな小鳥は、ときどきねむったように目をとじました。そしてときどきぱちりと目をあけて少年を見ました。小鳥はもうおびえませんでした。小鳥は少年のことばがわかるようでした。少年も小鳥のことばがわかるようでした。

しばらくして、小鳥のからだがびくびくふるえました。そして「おわかれですね、さようなら」というように、もう一度少年を見ました。

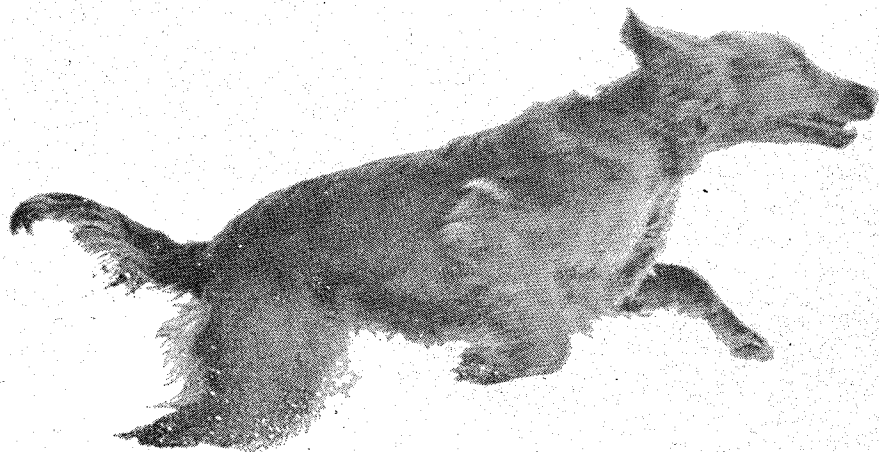
小鳥は目をして、少年の手のひらの中で二どとさめることのないねむりにつきました。そのとき、さむざむとしたくらい空に、ぱっと朝日がさしました。まるで小鳥のいのちがじずかにからだをはなれたことを知らせているようでした。

「さようなら」少年はそう言って、小鳥のやわらかい羽にほおずりました。「ごめんよ、こんな目に会わせて。」少年は小鳥の小さなあたまの上におちたなみだをふきました。

少年は小さな木のぼうをひろって、木の根もとにあなをほり、その中にやわらかい草をしきました。そしてその上に小さな小鳥をねかせてやり、やわらかい木の葉をかぶせて、土をかけました。そして小さな花をかざりました。

そのあいだ少年は、ずっとこんな歌を歌っていました。

さようなら、少しのあいだだけ
君はとんでいるんだね、天国の空を
いつの日か、ぼくも行くよ、
いつの日か、なかよくあそぼう
君とぼくとメイヤーで



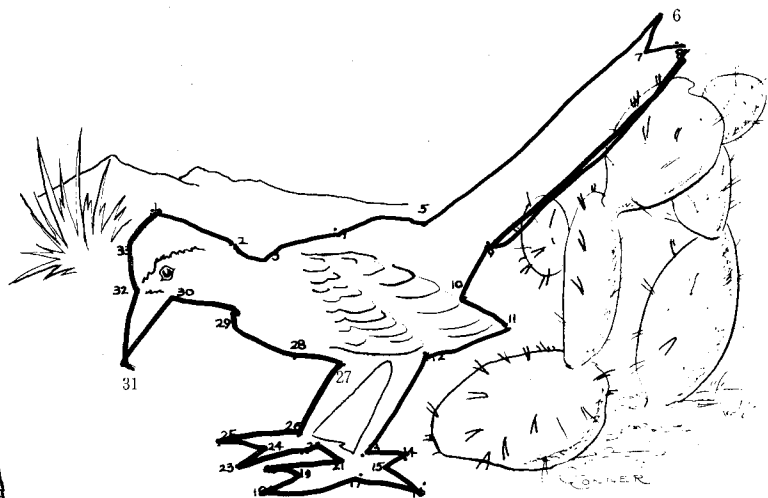
ふとんの中に、くまさんとくま
えさんのパジャマと同じものが、
あわせて8つあります。

さがしましょう！



アン・スタセー

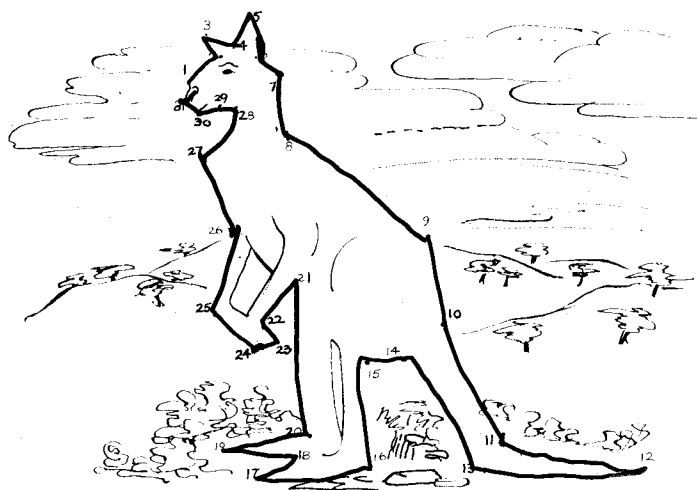
おもちゃばこ 1



てんをむすんでみましょう！

メキシコや合衆国のさばくにいる鳥です。

ロドラナー

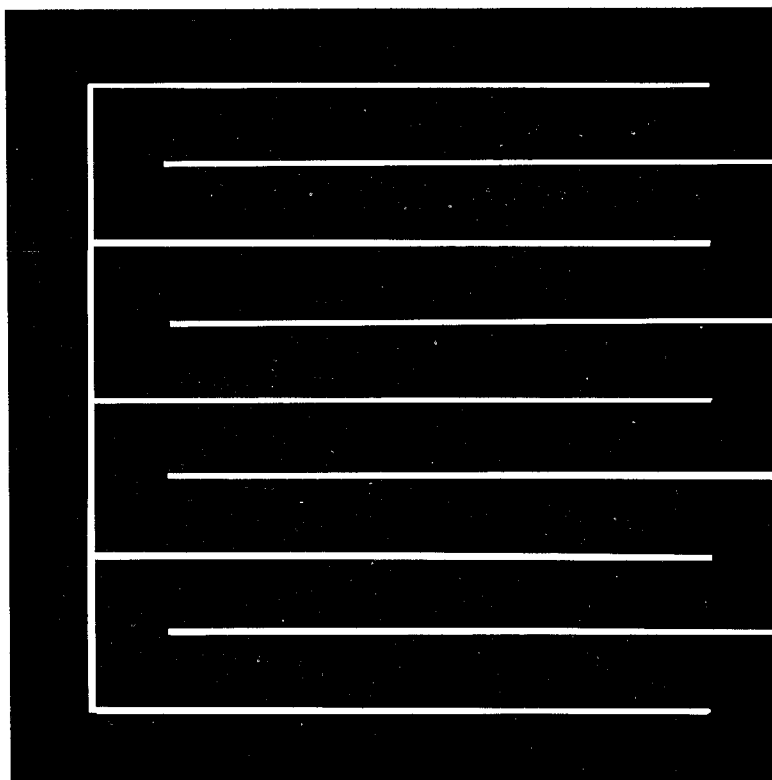


てんをむすんでみましょう。

オーストラリアにいる動物です。

さて何でしょう？

キヤロル・コナー



できるかな？

10センチの正方形の紙に頭をとおしてみましょう。

線のとおりに切るとできますよ。



小さな お友だちへ

悲しいことでしょうか。それとも
どうにもならないことでしょうか。

お話：スペンサー・W・キンボール大管長

私たちは生まれる前に、生まれてからどんなことがあるかを知っていました。うれしいこと、悲しいこと、楽しいこと、こまったこと、まだまだたくさんありますね。元気に学んだり働いたり、でも時には病気になることもあります。それからとてもうまく何かができるときもあるし、がっかりすることもあるでしょう。またわたしたちは、もうひとつたいせつなことを知っていました。それはいつか死ぬということでした。いつなのかはわかりません。それでもわたしたちは、よろこんでこの世に来たいと言ったのです。そのとき、わたしたちはなにも不平を言いませんでしたし、神様にむちゃなお願いもしませんでした。

神様は、わたしたちがしあわせにくらせるように、いろいろなことをしてくださいます。でもわたしたちが自分でしたいと思うことを決められるようにと、自由意志もくださいました。わたしたちはこの自由意志を使って、神様のご計画に従って生きていけばよいのです。でもそうしないと、むだに命をちぢめたり、死んでしまうことにもなりかねません。

人は必ず死ななければなりません。でも多くの人々は、そのときを自分で早めているようです。というのは不注意なことをして、きけんな目にあったり、じこをおこしたりして、けがをしたり、ひどいと命を落としてしまったりするからです。それからむちゃなことをして病気になったり、けがをすることもありますね。

神様は、病人をいやされるということを、みなさんは勉強しましたね。でもいつもいやされるというわけではないのです。また、神様は人がいつも楽にくらせるよう導いてくださ





るわけではありません。時には苦しんでいる人や悲しんでいる人をそのままにされることだってあります。なぜだと思いますか。そうですね。みんな神様のご計画の一部だからです。苦しいときに、人はその苦しみにたえることや、自分はどうすればよいかということを学びます。こういうことを何度も何度もくりかえすうちに、わたしたちは、少しずつ神様のようになりていくのです。

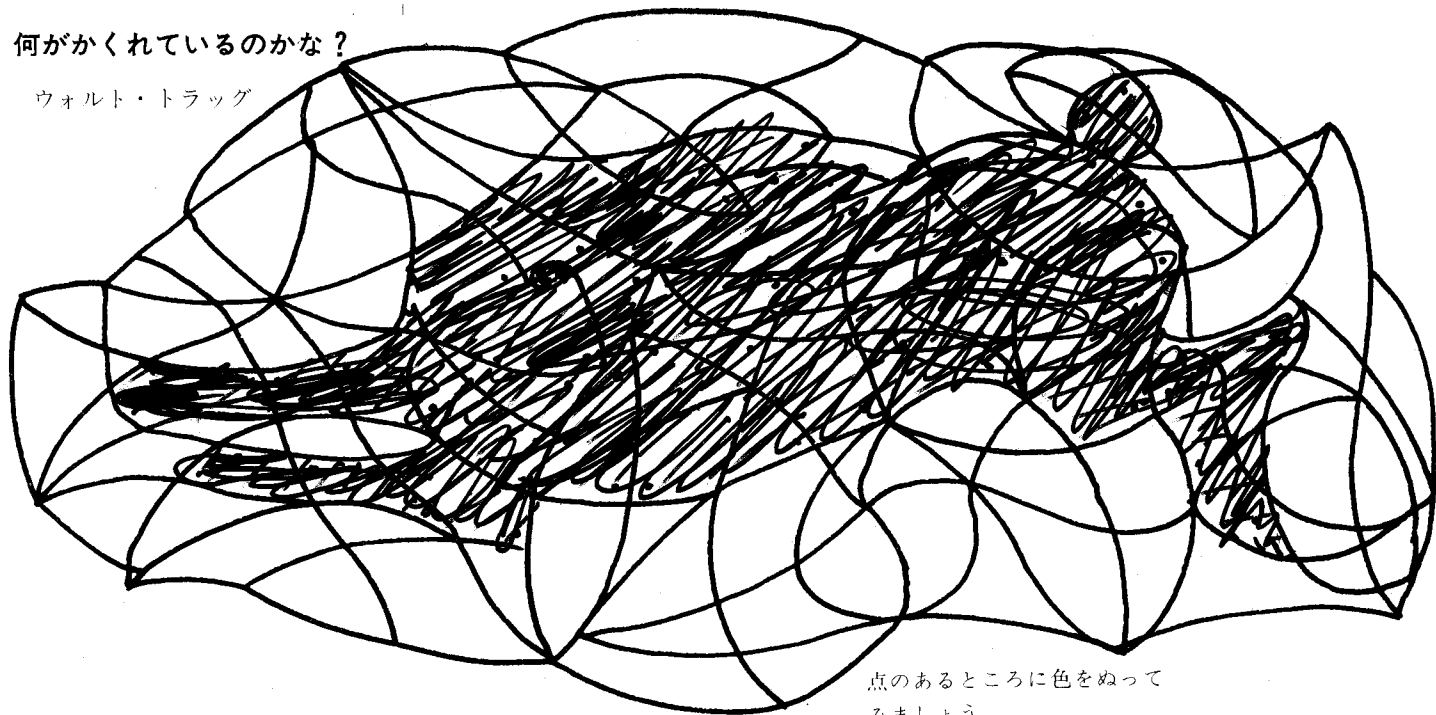
福音は、罪をおかすことは悲しいことだけれども、死ぬことは少しも悲しいことではないと教えています。だれもが死ななければなりません。でもこれは、わたしたちの生活の中で、とてもたいせつなことなのです。というのは、わたしたちは死ぬことによって、永遠の生命に入るきっかけを得ることになるからです。もちろん、いつ死ぬかはわかりません。ですから毎日毎日いっしょうけんめいに学んだり、働いたりしなければならないのです。

救い主がお受けになった苦しみは、試練でした。わたしはこのことを思うたびに、イエスさまがわたしたちにしてくださったことがうれしくて、なみだがこぼれそうになります。イエスさまは、ご自分で苦しまれて、わたしたちにととてもたいせつなことを教えてくださったのです。

わたしたちは、悲しいことがあったときに、神様を心から信じなくてはなりません。というのは、わたしたちの考えはせまくて、時には失敗することもあります。神様の目的は決して途中でくずれるということはないからです。わたしたちには、たくさんのこまったことや苦しいことがあります。でもそれはむだなことではないのです。なぜならわたしたちは、そういうときに、自分自身を高め、強めることができるからです。より多くのことを知ることができるでしょう。そしてかしくなるし、信仰も強めることができますね。そしていつか神様のところに帰って、神様といっしょに住むことができるようになるのです。

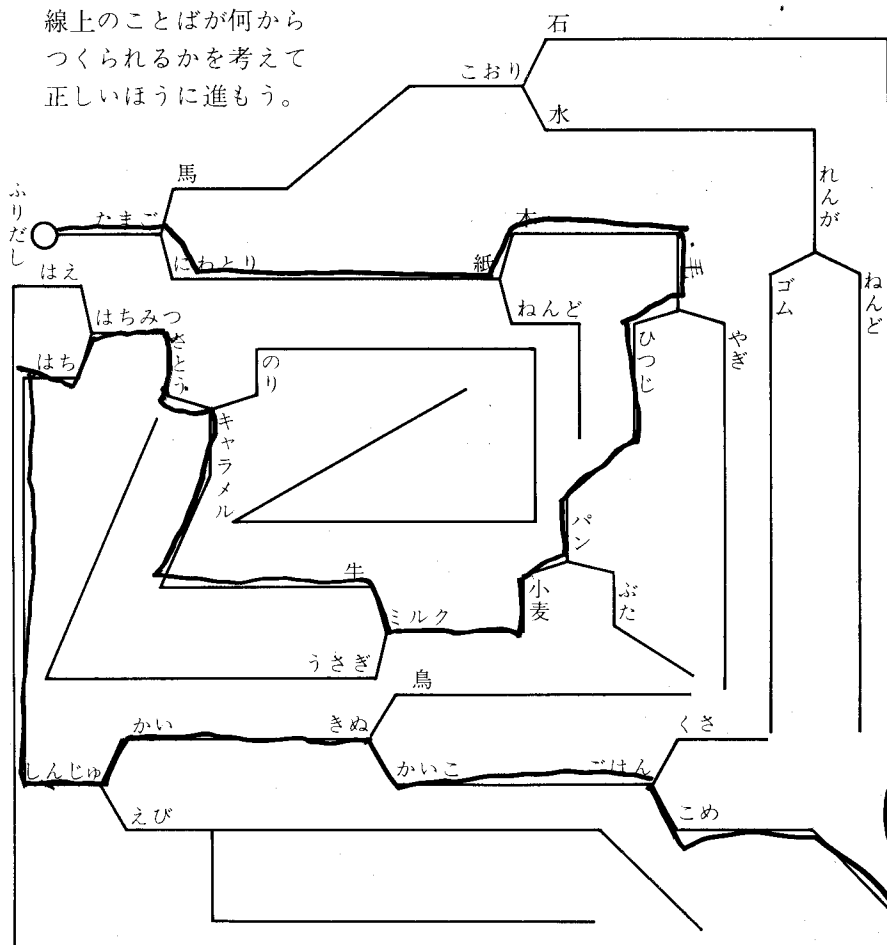
何がかくれているのかな？

ウォルト・トラッグ



点のあるところに色をぬってみましょう。

線上のことばが何から
つくられるかを考えて
正しいほうに進もう。



たからの
つぼをさ
がそう！



おもちゃばこ 2

質 疑 応 答

ここで与えられている解答は、解決の一助となるものであり、教会の教義として公式に宣言するものではない。

「人類の救いにとって、キリストの教会からの背教があってその回復のあることが必要だったのでしょうか。」

解答者／リチャーズ長老

私個人の答えですが、人の救いに背教は必要なかったと思います。なぜかと言えば、もし救い主と弟子たちの建てた教会が地上に続いていたら、福音の救いの儀式を行なう主から与えられた権能が存在したでしょうし、従って教会の回復も必要なかったでしょう。

ところが背教は現に起こり、福音の救いの儀式を行なう神権、つまり神聖な権能は、もう地上になくなってしまいました。そこで、そのような権能を地上に確立するには、回復以外に方法がなかったのです。

背教が起きたからといって、地上に教会がひとつもなくなったわけではありません。ただ、神の権能を持つ教会がなくなり、福音の救いの儀式を行なう権威ある人がいなくなったというだけです。

聖書には、イエスが設立されたもとの教会が背教に遇って、その結果どうなるかということが、たくさん述べられています。黙示者ヨハネはパトモス島に追放されたとき、主の天使に、「ここに上ってきなさい。そうしたら、これから後に起るべきことを、見せてあげよう」（黙示4：1）と言われました。天使はヨハネに、サタンが聖徒に（聖徒というのはキリストの教会の人たちのことでした）戦いをいどんで打ち勝ち、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を授けると教えました。（黙示13：7参照）救い主の建てられた教会がすっかり征服されて、背教の起きたことが、ここにはっきりと言われています。

天使はそれから、中空を飛ぶひとりの天使をヨハネに見せました。その天使は「地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえて」いました。（黙示14：6）むろん、永遠の福音とは人類を救い得る唯一の福音のことです。ヨハネはさらに書いています。「大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め。』（黙示14：7）

背教のまた別の証拠として、ジョセフ・スミスはすばらしい天の示現を受けました。その示現から、御父と御子は別々の栄光に輝くお方であり、それにもかかわらず世のキリスト教会は体や手足や感情のない神を拝んでいることがわかりました。それは神には目がないから見えない、耳がないから聞こえない、口がないから話せないということです。人々は福音の永遠の真理よりも人の教えの方に従っていたのです。

さて、モーセはこのような状態が支配的になることを知っていました。というのは、イスラエルの民を約束の地へ導くことになったとき、民はその地に長らえることができず、国々に散らされるであろう（申命4：26、27参照）と民に言い、次のように話しているからです。「その所であなたがたは人が手で作った、見ることも、聞くことも、食べることも、かぐこともない木や石の神々に仕えるであろう。」（申命4：28）これは、ジョセフ・スミスが栄光に輝く示現を見たときに、世のキリスト教徒が拝んでいた通りの神です。

しかしモーセはそれをそのままに放っておきませんでした。もしイスラエルが末の日に主を求めたならば（モーセは特に後の日と言っています）、主に必ず会えると言いました。（申命4：29-30参照）予言者ジョセフ・スミスは主を求めて、天使が「天と地と海と水の源とを造られたかた」と言った真実の生ける神を知ったのでした。

救い主の使徒たちが再降臨と世の終りのしるしを尋ねたとき、主は戦争と敵対と地震が起こると言い、さらにこう言われました。「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」（マタイ24：14）さて、主がここで言うておられるのは、当然主御自身や弟子たちが宣べ伝えた福音のことです。

完全な回復があることを証拠だてる別の聖句は、イザヤ書29章13、14節です。「主は言われた、『この民は口をもってわたしに近づき、くちびるをもってわたしを敬うけれども、その心はわたしから遠く離れ、彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、そらで覚えた人の戒めによるのである。それゆえ、見

よ、私はこの民に、再び驚くべきわざを行う、それは不思議な驚くべきわざである。彼らのうちの賢い人の知恵は滅び、さとい人の知識は隠される』。」

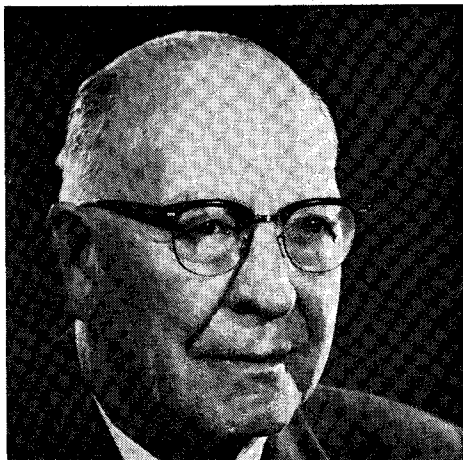
これまででわかる通り、もし主の福音が世上に続いていたなら、世の人々の間に不思議な驚くべきわざを行なう必要はなかったでしょう。しかし主は、民が人の戒めを教えるので、不思議な驚くべきわざ行なわなくてはならないと言っておられるのです。この状態は今もいわゆるキリスト教会のすべてに見られ、そのことも、回復が必要だったことを立証しています。

ペテロはペンテコステの日のあと、キリストを死に追いやった人々に対して、こう述べました。

「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである。このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかねばならなかった。」(使徒3:19-21)

私たちの教会は、万物の更新を主張している唯一の教会です。もしペテロが真の予言者だったとしたら、聖典の中の多くの約束通り、改革ではない、このような更新がないうちは救い主の再降臨を望めません。それで私たちは、聖なる予言者たちの口を通して言われていた万物の更新があり、予言者たちが再び地上を訪れて、聖なる神権の鍵と権威、福音の救いの儀式を行なう権能を地上にもたらしたと、全世界に言明するのです。

リブランド・リチャーズ長老
十二使徒評議員会会員



「また許してもらえからと悪いことをやめない人を、それでもずっと許していかななくてはならないのでしょうか。」

解答者／フェザーストン監督

教会員に対して投げかけられた質問で、絶対に許されると思いながら悪いことをし続ける人を、私たちは許すべきでしょうかということ。主はペテロの質問に対する返事の中で、このことを明快にしています。『……兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか』。イエスは彼に言われた、『わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい』。(マタイ18:21, 22)

ペテロの質問は、「わたしに対して罪を犯した」人のことだったのがわかりでしょう。先の質問は私たちに対して罪を犯す人ではなくて、罪を犯すのをやめない人のことのようにです。

悔改めはいいかげんな律法ではありません。悔改めようと考えながら罪を犯す人はわざわいです。その人は救いの大切な原則をもてあそぶ人です。後でまた罪を犯すかもしれないと考えながら悔改める人は、本当に悔改めているわけではありません。ただ良心を慰めるために、少しの間だけ罪の行ないをやめるに過ぎません。悔改めについてこのような間違った考えを持っているのですから、罪の行ないをやめさせる力は次第になくなり、罪人はまた罪に戻っていくでしょう。

教義と聖約の42章にはこう書かれています。「……誠心を以てこれを悔い改め再びなさざる時はこれを赦すべし。」(25節)ここでは大きな罪について言われていますが、この原則は悔改めを要する一切のことにあてはまると思います。私たちは真心を尽くして罪を捨て去らなくてはなりません。そうしてこそ、再び罪を犯さないようにしようという決意と靈感とが生まれて来るのです。

アロン神権に準備の福音、つまり「悔改めとバプテスマ、罪の赦し……の福音」(教義と聖約84:27)の鍵があることは興味深いと思います。監督はアロン神権の管理者として悔改めの鍵を持っています。そのため、重大な罪は監督に告白しなければならないのです。このように監督には、教会を代表して判断と赦しの決定を下す権能があります。

友である愛する若人たち、あなたがたは内密に監督のところへ行くことができるということを忘れないで下さい。監督

は決して秘密を漏らしません。ごくまれなことです。妥当だと感じれば時には名前を伏せてステーキ部長に助言を求めることはありますが。これが教会のやり方です。このようにして罪を犯した後悔い改めた人は神権の系統を通じた権威者から、靈感による助言と指導を受けることができます。

パウロからテモテへの訓戒には、得るところがあるでしょう。

「そこで、あなたは若い時の情欲を避けなさい。そして、きよい心をもって主を呼び求める人々と共に、義と信仰と愛と平和とを追ひ求めなさい。愚かで無知な論議をやめなさい。それは、あなたが知っているとおりの、ただ争いに終るだけである。主の僕たる者は争ってはならない。だれに対しても親切であって、よく教え、よく忍び、反対する者を柔和な心で教え導くべきである。おそらく神は、彼らに悔改めの心を与えて、真理を知らせ、一度は悪魔に捕えられてその欲するままになっていても、目ざめて彼のわなからのがれさせて下さるであろう。」(Ⅱテモテ2:22-26)

私たちが愛の属性をすべて身につけたなら、恐らく神は私たちを悔い改めさせて下さるでしょう。そしてその悔い改めの心が得られれば、ベンジャミン王のすばらしい説教を聞いたときに民が感じたと同じ、大きな望みを持つことでしょう。

「すると民は口をそろえて言った『まったく、われらは王の言われた言葉をみな信じ、またその言葉が確に真実であることを知っている。それはわれらの心を非常に改めさせ、悪を行う性質をなくして常に善を行う望みを与えたもうた全能の主の〔みたま〕に由るのである。』」(モーサヤ5:2)

悔い改めてから彼らの心に満ちた思いに注意してみてください。「悪を行う性質をなくして常に善を行う望みを与え」とありますが、これは正しい悔改めをしてこそ得られる状態です。またこの気持はだれにでも感じられるものです。

教義と聖約64章で、主はこのように言っておられます。

「この故にわれ汝らに告ぐ、汝ら互いに赦し合うべきなり。そは、人その兄弟の過ちを赦さざれば、その人主の前に罪に値する故にして、そは更に大いなる罪なお彼に在ればなり。主なるわれは、その赦さんと欲する者を赦す。されど汝らにはすべての人を赦すことを救めらる。」(教義と聖約64:9, 10) この言葉を理解すると、福音において大人になり、さらに深い理解が得られます。主は98章でも、人を赦し、ひたすら忍耐につとめる者のことを言っておられます。

「さて、われ汝らの家族に就きて告ぐ。もし、人々汝らもしくは汝らの家族に一度危害を与うとも汝ら忍耐してこれを堪え、彼らをののしりまた讐を返さんとすることなくば汝らよき報いを得べし。されど、もし汝らそれを忍耐して堪えずんば、汝ら正しき衡の量る如くに量らるる者と見なさるべし。また、汝らの敵再び汝らに危害を与うとも汝らこれをののしらず、忍耐してこれに堪うる時は汝らの受くるよき報いは百倍とならん。また、敵汝らに三度危害を与うともこれを

忍耐して堪うれば、汝らの受くるよき報いは前の四倍に倍増しせらるべし。」(教義と聖約98:23-26)

このような大きな試みを耐え抜いた人だけが、4倍の報いがあると言われる主の言葉の意味を知るでしょう。このような愛と忍耐を示すことによって、救い主が教えられた隣人愛を完全に理解し、実践することができるのです。私は、この大きな報いを受けられるほどの末日聖徒をまだ数えるほどしか知りません。ほとんどの人は、そのわずかな人たちの受けた慰めと祝福がいかに大きなものであるかを、理解さえできずにいるのです。私たちは本当の愛を知った人たちの態度を自分の目標とすべきです。

すべての末日聖徒は教義と聖約の次の聖句を銘記しなければなりません。

「さて、われ誠に汝らに告ぐ、主なるわれ、今汝らに罪を負わせざるべし。汝ら往きて今より罪を犯すなかれ、罪を犯す者には前の罪彼に返るべしと主なる汝らの神言う。」(教義と聖約82:7)

本当の悔改めは持続するものでなければなりません。いかなる人といえどもわけもなくできるようなものではないのです。悔改めは永久的で、主は私たちの罪をもう忘れると言っておられます。自分の罪を捨て、それ以後再び罪を犯さないならば、私たちには最高の祝福が用意されています。主は93章の1節でこう言っておられるからです。

「誠に、主かくの如く言う。その罪を捨ててわれに來り、わが名を呼び、わが声に従い、わが誠命を守るあらゆる人々は、わが面を見てわれに在るを知るべし。」

主はいいかげんな約束はされません。この祝福にふさわしい生活をしようではありませんか。

すべての若人にキリストのもとへ行く力が恵まれ、そうしたときに他のすべてのものが心から退き去るよう、祈っています。

ボーン・J・フェザーストン監督
管理監督会第二副監督



「豊かで

満ち足りた人生を

計画する」

大 管 長

スペンサー・W・キンボール



今宵、神権者と共に集う機会にこの上ない幸福を感じている。この土曜日の夜の神権会のために早くから集まって来られた父親の方々、ならびにその息子たちを拝見して喜びはまた格別である。大勢の方々は、良い席を取るために、1、2時間も前から集まって来

られた。また何千名もの父子が連れ立ってこのタバナクルへ、あるいは国中の数多くのステーキ部とワード部の建物へ急いでいる姿は喜ばしいものである。これは私たちが世に広め、愛している家族生活の喜ばしい一面であり、同時に、世の人々が本来家族のあるべき姿として認め始めているものである。すなわち、父親とその息子は家族生活の一環として一緒にここで時を過ごすのである。

私たちは皆さんの出席をいただき感謝している。皆さんに非常な感謝を覚え、また心からの愛を感じている。

まず、皆さんの献身と忠実な働きをたたえたい。全般的に神殿では最大限にその仕事が進められており、礼拝堂には人が満ちている。出席数は増加

し、献身度も増えている。家庭の夕べを開く家族も増加の一途をたどっている。私たちは、教会全体に見られる信仰と愛の発露を喜んでいる。特に、合衆国外のステーキ部と伝道部における会員数の増加と効果的な活動の進展を喜んでいる。この教会は、世界の教会である。さらに私たちは、人種、国籍を問わず全人類が属する教会へと不断に近づきつつあると信じている。

木曜日に他の指導者の方々と話し合った幾つかの事柄を、ここで皆さんに発表したい。大管長会と十二使徒評議員会は、すべてのワード部ならびに独立支部において長老定員会を組織することを認可した。これに従い、ワード部あるいは独立支部内に住む長老たちを、最大96名までその人数に関わりなく、会長会の下に長老定員会として組織することができる。96名以上の長老がいるところでは、定員会を分割する必要がある。幹部の兄弟たちは、より多くの地元のユニットで長老定員会を強く活動的にすれば、この偉大な力の蓄積組織を最も有効に利用できると考えている。

もうひとつ、神権に関する事柄として次のものがある。すなわち、ステーキ部長は、七十人最高評議員会から適正な手続きによって事前に承認を得た兄弟たちを、ステーキ部内で七十人に聖任し、また七十人会長に任命することができる。これは、今日この時をもって直ちに発効するものである。これに伴って、多くの遅延が是正され、ステーキ部指導者と七十人の間の活動が効果的に進むようになるにちがいない。この新たな変更に伴う効果が伝道活動にまで及ぶよう望んでいる。

指導者の兄弟たちに申し上げたい。

皆さんは、手引きや会報類を読んでいたら、数多くの手紙を節約できていたであろう。特に、神殿推薦状発行に先立つ面接に対して皆さんの注意を喚起したい。また、問題があれば監督のもとに行くよう、聖徒たちに勧めてほしい。

父親である皆さんが、確固たる態度で子息を育てていることに対して賞賛の気持をおくりたい。私たちは皆さんすべてを愛しており、皆さんの信仰を高く評価している。また、皆さんの成長と真価を誇りに感じている。年長の多くの子息はすでに伝道を終え、さらに多くの若者たちが、将来宣教師になるろうとしている。

皆さんは、人生を豊かで満ち足りたものにするために、計画を立てなければならない。執事である皆さんにとって、現在計画することは、必ずや豊かに人生を生み出すものとなるにちがいない。伝道に捧げるためにすでに貯金を始めているであろうか。

皆さんは、職業や生涯の仕事をまだ選んでいないかもしれない。しかし、たとえば将来弁護士か、医師か、教師か、技士か、いずれになるかわからなくても、人生において定めることのできる一般的なものがたくさんある。皆さんはすでに数々の決断を下しており、また現在下そうとしているものもある。今現在から結婚までの間に、皆さんは何をしようと計画しているだろうか。また、結婚のために何をしようと考えているだろうか。

皆さんは、きわめて忠実な執事、教師、祭司になるよう今決心することができる。取り消すことのできない誓約をもって今それを決心することができる。立派な聖徒になることができる

し、自分の時間を正しく有効に使うこともできる。もし自分の時間を適切に使うならば、あらゆる点で均衡のとれた、幸せな人生を送れるのである。

皆さんは今この早い時期に、伝道に出られる年齢になったら誉れある伝道をしようと決心することができる。そして、その目標を抱いて、お金をかせぎ、それを貯め、自分の伝道にそれを使い、また同時に、生涯の中の栄えあるその時期のために思いと心を十分に備えるため、学び、働き、あらゆる機会をとらえようと決意することができる。

伝道プログラムはどうしても従わなければならないものなのでしょうか、という質問を、これまでしばしば受けてきた。その答えはもちろん、否である。すべての人には自由意志が与えられている。また、すべての若い男性は伝道に出るべきでしょうか、という問合せもある。それに対する教会の回答は、然りである。また、主の答えも然りである。この答えを拡大して私たちはこのように言う。確かに、すべての男性会員は、什分の一を支払い、集会に出席し、清い生活を送り、世の汚れから離れ、主の神殿で日の光栄の結婚をするよう計画すべきであるが、それと同じように伝道に出るべきである。

以上あげたものはどれひとつ、強制ではないが、しかし自分自身のためにこれらを行なうべきである。次の詩は私たちによく知られている。

汝知らずや、人みな自由なるを
人生を選び、己が行く末を選ぶ。
とわなる真理与えられたれば
神、人を天は強いたまわじ。

知恵と愛と光もて、

説き、勧め、正しく導き、恵み
たもう。

はかり知れざる善とやさしさ、

しかれども人に強いたまわじ。

(英文讃美歌 90番)

福音のいかなる部分にも強制は存在しない。1833年、主はこう言われた。「見よ、ここに人の自由意志あり。而して、ここに人の罪を受くる所以あり。何となれば太初より在りしところのものは人々に明白なり。然るに、人々はその光明を受け入れざればなり。」(教義と聖約93:31)

これは、アダム以来、主は人々に正しい教義を教えてこられ、私たちはこれらを受け入れることも拒むこともできる、しかしその責任は私たちにある、という意味である。同時に、バプテスマの時に聖霊を受けている私たちは、皆善悪を区別できるという意味でもある。良心は私たちに、何が正しく、何が誤っているかをささやく。従って、私たちは他人を責めたり、自分の置かれた状況のせいにしてはならない。何が正しいかを私たちは知っているのである。

すべての人には自由意志がある。盗むことも、ののしることも、酒を飲むこともできる。ポルノ雑誌で心を汚すこともできる。怠惰に暮らし、自分の義務を怠り、性的な罪を犯し、また殺人さえ犯すことがあるかもしれない。そこには何の強制もない。しかし、罪は早晚、完全にそれに相応する罰をもたらすことを知らなければならない。それ故、悪行を選ぶ者は実際愚かだと言える。

人は皆、集会に出席せず、什分の一

を払わず、伝道に出ず、神殿で受けた義務と特権を無視することはなすがまである。しかし賢明な者ならば、それが恵みを失う行為であることを知っているにちがいない。

主はこれにも答えておられる。「また、人ことごとくその手に正義を取り腰に忠信を纏いて、世に住める人々に警めの声を挙げ、言葉と逃げ走ることと両つながらによりて悪人の上に荒廃のおそい来るを宣べんことを欲す。」(教義と聖約63:37)「人ことごとく」と言われていることに気づいたためであろうか。すべての少年も人の中に含まれる。当然のことながら、私たちは不浄な生活を送り、性的あるいはその他の罪惡に浸っている若者を伝道に出すことはない。このような若者は十分な悔改めによって清められる必要がある。そうして初めて、機会が考慮されるのである。従って再び繰り返そう。ふさわしく、かつ資格のある末日聖徒の男性はことごとく、伝道に出るべきである。

清くかつ自由な、豊かな満ち足りた生活を送れるよう、すべての若者は、自分の人生の方向を定め、また自分自身と天父に対して、自分がどんな人生を送り、それを榮えあるものとするために何をするかについて、誓約を立てる必要がある。

ある人がこのことを次のような話に言い表わしている。

「私は夢の中で、どことなく銀行のように見える、ある立派な建物に來た。しかしそこは銀行ではなかった。なぜなら、『時間売ります』という、真ちゅう製の看板がかかっていたからである。

そこで私は、疲れ切って青ざめた男

が痛々しげに体を引きずるようにして階段をのぼって行くのを見た。彼は病人のようであった。そして彼がこう言うのを聞いた。『医者に、来るのが5年遅かったと言われました。ですからその5年を買うんです。そうすれば、命が助かります。』

それからまた別の男が来て、事務員に言った。『神が私にすばらしい能力と才能を与えて下さっていたことに気づいたときには、もう遅かったんです。私はそれらを伸ばすことを怠ったのです。だから、なるはずだった自分になれるように、10年を売って下さい。』

次に若い男が来て言った。『会社から、もし私に準備ができていれば、来月からある重要な地位に就けると言われました。でも、私は準備してません。来月その地位に就けるように、準備するための2年をください。』

このように、病弱で、希望がなく、落胆し、苦しみ、不幸な人々がここを訪れた。そして微笑をもって帰って行ったのであった。その顔に言い尽くせない喜びの表情を浮かべて、それは非常に必要とし欲していたもの、時間を手に入れたからである。

やがて私は目覚めた。そして、これらの男たちが持っていないもの、彼らが決して買うことのできなかったものが時間が私にあることを喜んだ。私のしたい、そしてしなければならぬ多くの事柄を行なう時間を。もしその朝、口笛を吹きながら仕事に就いたとしたら、それは大きな幸せで心が満たされていたからである。もし時間を有効に使うなら、なお十分な時間が残るからである。」(著者不詳)

私がほんの子供の頃立てた目標のひとつについてお話ししよう。それはソル

トレーク・シティーから來た教会の指導者が大会で、私たちは聖典を読むべきである、と言ったのを聞いたことである。私はそれまで一度も聖書を読んだことがなかったのを認めた。そしてその夜その説教を聞いたあと、1ブロックほど離れた家に戻り、狭い屋根裏部屋への階段をのぼり、小さな机の上にある小さな灯油ランプに火をつけた。それから、創世記の初めの章を数章読んだ。1年後、私はその大きなすばらしい本のすべての章を読み終えて、聖書を閉じた。

私は読み続けていた聖書が66の書から成ることを知った。それから、聖書は1,189章にわかれ、(英文で)1,519頁もあることを知ったときには、読むのをやめようかとさえ思った。私の手に負えそうもなかった。しかし、他人にできることなら、自分にもできることを私は知っていた。

14歳の少年には理解しにくい箇所が数々あることを知った。また、特に興味のない頁もかなりあった。しかし、66の書を1,189章(英文で)1,519頁にわたって読み終えたとき、私はひとつの目標を定めてそれを達成できたという、言い知れぬ満足を味わったのであった。

私は今自慢をするためにこの話を今しているのではない。私が灯油の明りでそれをやれたのだから、皆さんは電気の明りでそれをすることができる。ただそれを言いたいのがために例としてこの話を使ったに過ぎない。私は1頁も残さずに聖書を読み通したことを今でも喜んでいる。

私が子供の頃に定めたもうひとつの目標についてお話ししよう。

私は知恵の言葉と、それを守って生

活するときにもたらされる祝福とを耳にして成長していた。私はタバコを噛んでいる人々をよく目にした。しかしその口もとににじみ出ている褐色の汁を見ると、何とも胸が悪くなるのであった。自分で巻きタバコを作り、多くの時間を無駄にしている人々も見えてきた。彼らは刻みタバコの包みと紙とを買い、1日のうち何度も、その紙に刻みタバコを広げ、それを巻き、細い方の端を曲げて、それからそのタバコを吸った。私には、それは全く無意味で時間とエネルギーの浪費であると思えた。しかしその習慣がしだいに広まってくると、やがて既製のタバコが買えるようになった。女性が喫煙を始めたときに味わった嫌悪感を私は今でも覚えている。

私は少年の頃、私の住んでいた小さな町の通りで催された独立記念日の祝いに行ったときのことを覚えている。そこではある人々は競馬に興じ、またある人々は賭け事師のようにそれらの馬に賭けていた。また、多くの人々がタバコを口にし、ポケットに酒ビンを持っていた。そして、ひどく飲んでいたので目もうつろで、やたらにしゃべり、不敬な言葉を吐いていた者もいた。

ポニーの組合せをしてレースの準備ができるまで少しの時間がかかった。そして、ほとんどそのたびに、だれかが「やろう、やろう」と声をかけた。すると男たちは、少年も含めて皆決められた場所に集まって、なぐり合い、血を流し、ののしり、憎しみ合ったのであった。

私は人々がこのように恥ずべき行為に走っているのを見て、また胸を悪くした。そして、その休日にピンクレモ

ネードを飲み、走る馬をながめながら、この小さな町に住むこれら多くの隣人のように、ウイスキーを飲んだり、不敬な言葉を語ったり、ののしったり決してしないようにしようと、再び決心したのであった。

私が知恵の言葉を決して破らないようにしようと決心したのは、まだ小さな子供の頃であった。しかも、だれからも強制されずにそうしたのである。私はそれがどこかに書かれてあり、主がどう言っておられたか、おおよそを知り理解していた。また、主がこれを告げられたとき、これらすべての有害な要素を断つことを主は喜ばれること、従って私がしたいと考えた事柄は天父の喜びであることを、私は知っていた。そこで、私はこれらの有害なものに決して手を出すまいと堅く決心したのであった。十分に、またはっきりと決心したので、自分自身と天父に対して立てたこの約束を守り通すことは大して困難ではなかった。

後年、アリゾナ州のロータリークラブの地方理事をしていたときに、国際会議でフランスのニースに出かけた。その祝賀会の一環として、地方理事のための豪華な夕食会が催され、広い会場に豪華な食事が準備された。その会場に到着したところ、それぞれの席に7つのグラスがおかれていた。また銀食器と皿が数多く並んでいた。しかもすべて、ヨーロッパで最上のものばかりであった。

食事が始まると、ウェ이터たちが給仕のために入って来て、各テーブルに7人ずつつき、ワインとウイスキーをついだ。各席におかれた7つのグラスにアルコールがつがれ、美しい色を放っていた。私は故郷を遠く離れてい

た。そして多くの理事を知っていた。また彼らも私を知っていた。しかし恐らく彼らは、私の宗教も、知恵の言葉に対して私の取っていた態度も知らなかったことだろう。いずれにせよ、悪魔が私にささやきかけるような気がした。「いい機会だ。お前は国からはるか離れた地にいるんだ。ここにはお前を見ている者はいないぞ。グラスの中のものを飲んだって、だれにもわかりっこない。いい機会だ。」次に心地良いみたまのささやきを感じた。「お前は自分自身に誓約を立てている。決してそれを破らないと約束した。天父とも誓約を交わし、これまでそれを破ったことはない。この誓約を破ったら、今までのことはすべて水の泡だ。」1時間後にその席を立ったとき、7つのグラスはそのままであったと言えば十分であろう。グラスは、1時間前にアルコールがそそがれたまま、手も触れることなく、美しい色彩を放っていた。

さらに、少年時代のことを今思い出す。ある時、私たちのところに来た郡治安官から、私たちの住んでいた通りのすぐ北側にある家の木造のポーチの床下が、窃盗品の格好の隠し場所になっていたことがわかったと聞かされたときには、とても恐ろしかった。いや驚いたと言った方が良いだろう。その家に住んでいた若者は、窃盗狂だったのである。彼は物を盗む癖があったようである。だからと言って、自分がそれを使うかと言えばそうではない。それまで町中の多くの人々から、馬車のむちと馬車用のひざ掛けがなくなったという届けが出されていた。これらの盗難品はそのポーチの床下にあり、この少年も最後にはそれらを盗んだことを認めた。私たちがそのことでどれほ

どのショックを受けたか、また彼がこの恐ろしい弱点に打ち負かされたことで私たちは彼をどれほど気の毒に思ったか、今でも覚えている。

R・W・エマソンは言っている。「人は皆、隣人にだまされることがないように気を配る。しかし時が経つと、自分がその隣人をだますことがないように心を配る日が訪れる。それから万事が好都合に進む。彼は買物用の手車を日輪の凱旋車に変えたのである。」
("The Complete Writings of Ralph Waldo Emerson"「ラルフ・ウォールド・エマソン全集」P.585)

私たちの行ないがどのように私たち自身に付き従うか、そして自分の蒔くものは必ず自分で刈り取らなければならないことを、この少年は知らなかったのである。私たちのすべての体験は人生の価値を増すか、あるいは損なうかのいずれかである。邪悪な思いを抱いたり、邪悪なことを行なえば、必ずそれ相応の報いが下される。

最近ある新聞に、2百万ドル以上の高額の額面小切手を拾った少女の話が出ていた。彼女はすぐにそれをどのように使おうかと思い巡らし始めた、あとで語っている。しかし結局、その小切手を持ち主に返した。そして新聞によると、彼女が期待していたよりもずっと少ない礼金を受けたのである。正しいことを行なったことに対してなぜ報酬を期待するのだろうか。贈られた礼金に、なぜがっかりするのだろうか。人々は善行に報いを受ける必要があるだろうか。皆さんは、遺失物を返すときにお礼を期待しはしないだろうか。皆さんは、信仰箇条の第13条を学んでいることだろう。「われらは、正直、真実、貞潔、慈善、高德なるべき

こと、およびすべての人に善を行うべきを信ず……」

私は万引き行為について少し話したいと思ったが、時間がないようである。私たちの社会において、商店が万引きに対処するために、利益の中からかなりの割合を別分けしておかなければならないということは、全く恥ずかしいことである。末日聖徒の社会において、少なくとも住民の一部が末日聖徒の社会において、このようなことがあるとはいまわしいことである。

では、もうひとつのちょっとした体験をもって話を結びたいと思う。それは、ペルーのトクエパラでのことである。私たちは教会堂を献堂していた。その鉱山の町で働いていた人々の多くはアメリカ人であった。献堂式の後、彼らはある家で食事をした。私たちがその家でほかの部屋に移ったところ、男の子が私のもとに来て言った。「キンボール兄弟、僕、伝道に出ようと思ってるんです。僕に祝福を与えて下されませんか。」

そこで私は尋ねた。「ああ、いいでしょう。祝福を与えることはとてもうれしいことだからね。でも、先程別の部屋でお会いしたのは君のお父さんではないかな？」

「ええ、そうです。」

「じゃ、なぜ祝福をお父さんに頼まないのかな？」と私が聞くと、彼は答えた。「お父さんは祝福したくないと思います。」

そこで私はその場を出て、すぐにその父親のもとに行き尋ねた。「あらに素晴らしい息子さんがいますね。彼は父親のあなたから祝福を受けたいと思っていますが、あなたは彼に祝福を授けたいとは思いませんか。」

すると彼は、「息子は私に祝福を頼まないとします」と言った。

しかし、その家にいた会員たちが一緒に集まったとき、私はその父親と息子が間もなく並んでそこにいるのを目にした。ふたりは同じ思いを持ち、その少年は父親は喜んでその申し出を受けたことが私にはわかった。

この会に臨んでいる少年たちは、この話を心に留めておいていただきたい。皆さんには、世界で最も素晴らしいお父さんがいる。皆さんのお父さんは神権を所有しており、喜んで皆さんに祝福を授けることであろう。父親は皆さんにそれを示したいと望んでおり、私たちは父親に子供たちは時として内気な態度をとることを覚えていてほしいと思う。子供たちは父親の皆さんが世界で最も素晴らしい人であることを知っている。しかし、皆さんがそれを示唆するならば、恐らく皆さんにとって非常に栄えある時を得ることであろう。

兄弟の皆さんと、今宵この場で共に過ごせることは、素晴らしい経験である。皆さんに平安が与えられるように。また、ここ数日間何度も言われてきたことであるが、義のみが恵みをもたらす。神が皆さんを祝福されんことを。私は少年ならびに成人の皆さんに証申し上げる。神は生きておられ、イエスはキリストである。これは救いと昇栄の偉大な計画であり、唯一の道であり、不義の中には決して幸福は見いだせない。私たちの主イエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。

愛する兄弟たち、私は今日、「汝ら主の器を持つ者よ潔くあれ」（教義と聖約 133：5）という聖句をテーマとして、心にあることを述べたいと思う。これは神権の召しを全力を尽くして遂行するあなたがたにとって、実に時宜を得たテーマではないだろうか。まず初めに、私は証を述べたい。私はキンボール大管長が予言者であり、主よりその代弁者として召された人であること、またタナー副管長も、啓示により第一副管長に召されたことを、みたまの力を通して知っている。私はこのふたりを「誠心より」支持するものである。（教義と聖約17：1）

このようにしてあなたがたの前に立っていると、私はペテロが当時の兄弟たちに向かって自らの思いを述べたときと同じような気持ちにかられる。ペテロは言った。「……あなたがたは、選ばれた種族、王国の神権者……」（欽定訳Ⅰペテロ2：9）この地上に住むあらゆる人々の中で、私たちは最も榮譽ある民である。

私たちは神の霊の息子として前世で大会議に臨み、天父が福音の計画をお示しになるのを耳にした。そして第一の位を保つ者はさらに付け加えられ、第二の位を保つ者は「とこしえに栄光をその頭に付け加えられん」と、そのみ言葉を拝聴したのである。（アブラ

「汝ら

主の器を持つ者よ

潔くあれ」

第一副管長

マリオン・G・ロムニー



その頭に付け加えられることを望むならば、この地上にいて次のふたつのことをなさねばならない。まず第一に神権を受けることであり、第二に神権の召しを全力を尽くして遂行することである。主は、神権なくしてだれもこの栄光にあずかることはできないと言われた。「而して汝らが受けたこの神権に來らざる者は禍なるかな……」（教義と聖約84：42）

神権を受けた私たちは、神権の召しを全力を尽くして遂行するならば、さらに栄光を付け加えられるであろう。さて私はあなたがたに、主が神権につける誓約を私たちにお与えになるときに用いられた言葉を聞いていただきたい

ハム3：26）

私たちは第一の位を保った。なぜなら肉体を「付け加え」られてこの地上にいるからである。

私たちがさらに「とこしえに栄光を

いと思う。

主は言われた。「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得、而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは、(ただ受けるだけではない。受けて全力を尽くして遂行するのである)、『みたま』により聖められてその肉体再新さる。

これらの者はモーセの息子たちとなり、アロンの息子たちとなり、(引用している章、すなわち第84章の啓示の前の部分で、主はメルケゼデク神権者をその神権の位に基づきモーセの息子たちとして、またアロン神権者とその神権の位からアロンの息子としておられる)アブラハムの子孫となり、また教会員にして王国の民となり神の選民となる。(私たちの意図するところはこの召しと選びを確かなものにする事である。そしてそれを可能にする唯一の方法は、とりもなおさず、神権を受け、その召しを全力を尽くして遂行することである。続けて主は約束された。)

主は言う、またすべてこの神権を受け入る者は、われを受くるなり。

(このことを考えていただきたい。神権を受け、その召しを全力を尽くして遂行する者は『われを受くるなり』と主は言っておられる。)

そは、わが僕らを受け入る者はわ

れを受くればなり。

また、われを受け入る者はわが父を受くるなり。

而して、わが父を受け入る者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。(かくして栄光はとこしえに付け加えられ、主の持てるすべてのものが私たちに約束される。)

而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。この故にこの神権を受くる者は、すべてわが父のこの誓詞と誓約とを受け(主からこの約束を受け)、而してこれをわが父は破ることも変えることも為したもうはずなし。

(破るのは私たち人間の側である。そして実際多くの人々がこの誓約を破ってしまう。その結果はこうである。)

されど何人にまれ一度この誓約(神権を尊び、その召しを全力を尽くして遂行するという誓約)を受けで後これを破り、またことごとくこれに違背する者はこの世に於ても未来の世に於ても罪の赦しを受くることなかるべし。

(ここで主が述べておられるのは必ずしも赦されざる罪のことではなく、この神権を受けてしかもなおその何たるかを理解していながら、召しを全力を尽くして遂行しない者は、後の世で取り戻そうと思っても取り戻せないものを失ってしまうということである。)

われ今汝らに一つの誠命を与えて自らを警めしむ。すなわち汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。

そは、汝ら(神権を受けたる者は)神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。』(教義と聖約84:33-44)

この訓告から私は、「1847年1月14日、アイオワ州カウンスル・ブラフスの近くミズーリ河の西岸、オマハネーションのイスラエル陣営の冬季野営地に於て、大管長ブリガム・ヤングを通じて」与えられた偉大な啓示の中の主のみ言葉を思い出した。(教義と聖約136前書き)

「……そは汝らいまだ潔からざればなり。また、汝らいまだわが栄を受くる能わず、されど汝ら忠実にわが言いたる言をすべて守らば栄を見ることを得ん。この言はアダムの時よりアブラハムに至り、アブラハムよりモーセに至り、モーセよりイエスとその使徒に至り、イエスとその使徒よりジョセフ・スミスに(そして私たちはこう付け加えることができよう。すなわち『そしてキンボール大管長に』)至るまでのものにして……」(教義と聖約136:37)

「神権に属ける誓詞と誓約」という言葉を考えるとき、あなたがた一人一人もかつて同じ経験をしたことである

うが、私は、約束された祝福の崇高さに畏怖の念をおぼえ、また同時に、その祝福を受けるに必要な条件を考えると、自らを低くせざるを得ない。

約束の祝福を受けるために、私たちが「勉めて心を留め」なければならぬ「神の口より出る」「永遠の生命の言」は数多くあると思われる。その中に次の戒めがある。「安息日を覚えて、これを聖とせよ。」（出エジプト20：8）

私たちの時代にあつて、主は安息日を守ることを非常に重要視しておられる。聖徒たちが初めてミズーリ州インデペンデンスに集合したとき、主はシオンを建設しそこに住む人々が守らなければならない標準を示された。その中で強調されたもののひとつが、安息日の遵守である。主は言われた。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様、祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。

そは誠にこの聖日は、汝命ぜられて働きを休み、いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なればなり。

されどこの主の聖日に於ては、いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉りて、兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。

而して汝この日には他に何事をもなすことなかれ。たゞ汝が断食を完から

しめんため、言い換うれば汝悦びを以て充されんため、真心をこめてその食物を支度することのみを為すべし。」（教義と聖約59：9，10，12，13）

私たちは安息日を安息日として過さないことが普通になっている社会に住んでいる。そのような中で神権の召しを全力を尽くして遂行するために、私たちは、世にあつて世のものとなつてはならない。なぜなら主はこう言われたからである。「シオンに住む民は、また安息日を守りてこれを聖くすべし。」（教義と聖約68：29）

安息日に買物をするべきではない。安息日にシオンの町で買物をする人はひとりとしていないだろう。

安息日に娯楽行事に参加したり、猟やつりに出かけるべきではない。

もし、私たちが神権の召しを全力を尽くして遂行したいと心から思うならば、主が教義と聖約の59章で与えられた指示の範囲内で安息日を過ごすはずである。

ほかにも「永遠の生命の言」をあげてみよう。

「……汝らは主の器を持つ者よ潔くあれ。」（教義と聖約133：5。38：42も参照のこと）

「だから世の人々よ、汝らはみな自分のしたことに対して裁きを受けるようになることを記憶せよ。

それで、もしも汝らが自分らの試しの生涯で悪いことをしようとするならば、神が裁きをなさる座で自分たちが汚れていることが解るであろう。汚れているものは神と一しょに住むことができぬから、汝らは永久に捨てられなくてはならない。」（Ⅰ ニーフアイ 10：20，21）これはニーフアイの言葉である。

「しかしごらん、まだよく聞け。神の王国はけがれているものでないから、どんな不潔なものも神の王国に入ることができないのである。……」（Ⅰ ニーフアイ 15：34）

それから600年の後、復活したイエスはニーフアイ人の弟子たちにこう語られた。「そもそも、清からざるものは御父の王国に入ることを得ず。信仰をし、すべての罪を悔い改め、終りまで誠をつくし、以てわが血によりてその衣を洗いし者のほかには御父の安息に入り得る者なし。」（Ⅲ ニーフアイ 27：19）

この末日の神権時代の初頭、イエスは大会に集った兄弟たちにこう言われた。「……汝ら主の器を持つ者よ潔くあれ。」（教義と聖約133：5）

以上あげた聖句は、パウロがコリント人へ書き送った手紙の中の一節を思い起こさせる。「あなたがたは神の宮であつて、神の御霊が自分のうちに宿

っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。」(Iコリント3:16, 17)

現代社会は汚れた行為のつぼと化している。もし神権の召しを全力を尽くして遂行しようと思うならば、私たちはそのような社会に対して油断なく、身を固めておかなければならない。

主は知恵の言葉の中でそれらの行為についていくつか警告を与えられた。

「すなわち、汝らの中に葡萄酒または強き飲料を飲む者あらば、見よ、それは宜しからず。また汝らの御父の眼にも適わざるなり。……」

「……タバコは体のためにならず……。」

「また言う。熱き飲料は体や腹のためにならず。」(教義と聖約89:5, 8, 9)

言うまでもないが、いかなる種類のものであっても、習慣性のある薬剤を飲用することは知恵の言葉の真意をそこなうものであり、心身共に汚れることになる。

召しを全力を尽くして遂行しようとする神権者は、私たちのこの放縱の社会に蔓延するあらゆる汚れ、書物に、ステージやスクリーンに、娯楽場に、

その他いろいろなところで見受けられる汚れを遠ざけるはずである。神は潔くない神権者がみもとに来るのを許したまわない。

今日の私たちの社会を我がもの顔にはいかいする最も堕落した、人を卑しむ者にする悪は、不貞という悪である。主がシナイ山からとどろくような声で語られた言葉をもう一度思い起こそうではないか。「あなたは姦淫してはならない。」(出エジプト20:14)

モーセの律法では、この罪を犯した者の受ける罰は死であった。私たちが住むこの堕落と放縱の時代にあって、人々は、この罪を犯しても別に罰を被ることはないと考えている。しかしながら神の律法にあってこの罪が人の霊を滅ぼす罪であることは、いつの時代も同じである。その受ける報いは霊の死なのである。姦淫の罪を犯し、まだ赦しを得ていない人は、神権の召しを全力を尽くして遂行しているとは言えない。クラーク副管長はかつてこう語った。「主は私通(未婚の男女が性的な関係を持つこと——訳者注)と姦淫との間にいささかの区別もおいておられない。」(Conference Report「大会報告」1949年10月〔英文〕P.194)私はこう付け加えたい。「主は姦淫と性の倒錯を、いささかも区別しておられない」と。

イエスが私たちにお与え下さった標準はこうである。

『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。

しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」

この罪がいかに重大であるかは次の節で明らかである。「もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に投げ入れられない方が、あなたにとって益である。」(マタイ5:27-29)

確かに私たち神権者は、神権の召しを全力を尽くして遂行し、やがては永遠の生命を得て「とこしえに栄光をその頭に付け加えられる」者として、次の主の戒めを守るよう熱心に務めるはずである。「汝ら主の器を持つ者よ深くあれ。」(教義と聖約133:5)

そのようになることをへりくだり祈りつつイエス・キリストのみ名により、アーメン。

多くの場所において、直接間接にこの会に臨んでいる神権者の兄弟たち、（今晚、この会には20万ほどの人々が臨んでいるが）この集りは王の軍勢、偉大なる兄弟たち、世にあって最も大いなる力である。神の神権者たること末日聖徒イエス・キリスト教会の偉大なる兄弟の中のひとりであること、それは何たる幸福、何という祝福であろうか。

今宵、私たちは導きを受け、みたまを受け、信仰と証を築き、美しいコーラスを楽しんだ。さて私たちはこれからほどなくして、神の予言者の声に耳を傾ける特権にあずかる。彼はイエス・キリストの教会の大管長、地上における今日の主の代弁者である。彼が語るとき、私たちはこの偉大なる指導者スペンサー・W・キンボールに従おうという決意と聞く耳とをもって、彼の声に耳を傾けようではないか。

私は主が選ばれた4人の予言者に、副管長として仕えるというこの上ない特権にあずかった。私は彼らが真に神の予言者であることを証する。私はここで皆様方と共に、主が教会の指導者たちをどのようにして選び、聖任し、任命したもうかを再度考えてみたい。その継承は、何と円滑に行なわれることであろうか。

イエスは地上におられたとき、伝道を始め教会を建て、「弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び出し、これに使徒という名をお与えになった。」（ルカ6：13）そして主は使徒たちに言われた。「よく言うておく。あなたが地上でつなぐことは、天でも皆つなぐがれ、あなたが地上で解くことは、天でも皆解かれるであろう。」（マタイ18：18）

このことから、主は彼らに鍵と権能を含む完全な使徒職を与えられたことがわかる。彼らは時来たらば先任使徒として、または教会を預る者として働くことができた。ペテロ、ヨハネはキリストが地上を離れたもうた後、最高の管理体として任命されたのである。

主に選ばれし者

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー



されるはずの12人を捜し出すよう指示を受けた。（*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」第2巻P. 186, 187, 教義と聖約18章）

その人々は予言者ジョセフの指示に従って選ばれ、使徒に聖任され、パウロやイエス・キリスト時代の使徒たちに与えられたと同じ権能を与えられた。このことは次のように記されている。「またこの十二人は、前記の三人の管理大祭司（教会の大管長会）と権威と権能とを同じくせる定員会を構成す。」（教義と聖約107：24）

また、「教会歴史記録」にはこう記されている。「次にスミス大管長は現在の大管長会の次に位置する十二使徒の義務と権能について説明した。……また十二使徒は、『私ならびに現在私の副管長であるシドニー・リグドン、およびフレデリック・G・ウィリアムス』によって構成される大管長会以外のものの管理は受けない。『もし私がいなくなれば（死ねば）、十二使徒を管理する大管長会はなくなる』。」（「教会歴史記録」第2巻P. 373-74）

ウィルフォード・ウッドラフ大管長は語っている。「末日聖徒の皆様に申し上げる。神の王国の鍵はここにある。またこれからもあるであろう。人の子の再臨のときまで。すべてのイスラエルに知らせよう。……かつて地上に存在した者のうちで、神の王国の鍵を持ちながら人を迷いに導いた者はひとりもない。」（*Discourses of Wilfoed Woodruff*「ウィルフォード・ウッドラフ説教集」P. 73, 74）

ジョセフ・スミスの死後、ブリガム

末日における教会も、同じ原則に基づいている。ジョセフ・スミスが主に選ばれた後、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが現われて、彼とオリバー・カウドリにメルケゼデク神権を授け、彼らを主イエス・キリストの使徒に聖任した。

教義と聖約には、ジョセフ・スミス（二代目）は教会の第一の長老として召されたと記されている。「……父なる神の御ところと汝らの主イエス・キリストの恩恵とにより汝は聖見者・翻訳者、予言者、イエス・キリストの使徒、教会の長老と称せられん。また汝は聖霊に感じて教会の基を築き、それを最も聖き信仰に築き建てん。」（教義と聖約21：1, 2）

12人の使徒が召されることと、その人々を選ぶ方法について予言者とオリバー・カウドリに知らされたのは、教会が組織される前年1829年6月であったが、最初の十二使徒評議員が任命されたのは1835年のことであった。それからモルモン経の3人の見証者たちは予言者ジョセフ・スミスを通して与えられた主の指示のもとに、使徒に聖任

主に選ばれし者

・ヤングは次のような言葉をもって会を召集した。「私はさまざまな神権定員会に属する人々と特別な会を開き、そこで喜びを共にしたいと思う。……」そしてこの集会で彼はこう述べた。

「……私はこの時代におけるイエス・キリストの使徒——予言者ジョセフを通して啓示によって神に召され、地上の神の王国の鍵の保持者として聖任され油注がれた使徒として、十二使徒定員会の私の召しを遂行する。」

そして彼はこう尋ねた。「教会はこう望んでいるのだろうか。彼らは十二使徒が人々の最高管理体として支持されることを望んでいるのだろうか。」この案は全員一致で支持され、彼が反対の挙手をとったが、手を挙げる者はいなかったと記録されている。

ブリガム・ヤングが、順次神権定員会の支持を得ようとしたことは明らかである。同様に今朝私たちも、聖会においてそれを行なった。彼はこう言っている。「これ（この支持の方法）は他の方法に代わるものである。またこれは定員会ごとに行なわれる。」（「教会歴史記録第7巻P. 230, 232, 240」）続いて彼は、新しい大管長会が組織されるまで、十二使徒はひき続き元の地位に留まって働き、王国の鍵を持ち、教会の業を管理し、すべての事柄に対して正式な指示を与えると説明した。ジョセフ・スミスの死以来、これまでずっとこの手順がとられてきた。そのように、このときも大管長会が組織され、ブリガム・ヤングが教会の大管長となるまで3年半の間、十二使徒が教会を指導したのである。

ウィルフォード・ウッドラフ大管長は、なぜ十二使徒会の会長以外の者が教会を管理するよう召されるべきではないのか、その理由を問われたとき、このように答えている。「第一に、教会の大管長が亡くなった時だれが教会を管理する権能を持つのだろうか。それは神の啓示によって聖任され組織された十二使徒定員会である。他のいかなるものもこの権能を持たない。では、十

二使徒が教会を管理するときは、だれが教会の管理者となるのだろうか。それは十二使徒会の会長である。大管長会が組織され、大管長が2名の副管長を管理するときに、大管長が教会の管理者であるように、彼が十二使徒を管理する間は、事実上教会の管理者である。」これは1887年3月28日ヒーバー・J・グラント長老宛の手紙の中に述べられており、ウィルフォード・ウッドラフの署名がある。この原則は今に至るまで百年有余続いているのである。

教会の全歴史を通じて、教会の大管長として選ばれた人々は、確かに予任された、その時期に最もふさわしい人であった。ジョセフ・スミスは初めてブリガム・ヤングに会ったとき、将来彼が教会の大管長となるであろうと言ったと記録されている。ブリガム・ヤングが十二使徒会の会長となり教会の大管長となった出来事について考えてみると、エレミヤやその他の予言者がそうであったように、彼は確かに生を受けるずっと以前から予任され選ばれていたことがわかる。

予言者ジョセフが世を去ったとき、教会の大管長としての責任を受ける準備のできている人はいないように思われた。ジョセフは教会のために啓示を受ける賜を授けられた人、他の多くの予言者に勝る力を備えた人であり、彼こそ、その業を遂行するにふさわしい人であった。しかし彼の死後教会の大管長となったブリガム・ヤングも、その時代のために備えられた人だったのである。彼もその時に必要な事柄を行なう特別な賜と才能とをもっていた。ブリガム・ヤングは偉大な指導者であり、開拓者であり、組織者であった。彼はかつて予言者ジョセフが予言した通り、まさしく教会を導びく人、ロッキーマウンテンのただ中に教会を打ち建てる人であった。

また、ジョン・テイラー大管長がいかにして守られたかを知れば、さらにこのことに納得がゆく。ジョン・テイラーは殉教するはずの人であったかも

しれない。しかしながら彼は、ジョセフ・スミスが殺されたときに受けた致命的な傷に耐えたのである。彼の働きをすべて考えてみれば、彼が確かにそのとき必要とされていた人であることの裏付けが得られる。同じことが彼に続く教会のすべての大管長にも言える。

リー大管長が教会を管理した期間はほんのわずかであったが、彼の指導のもとに大なる進展と成就があり、教会のさらに大きな進歩と成長の基が置かれたことを理解するに違いない。

今私たちは、主に選ばれ予任された新しい大管長を迎えた。彼は30年間使徒として訓練され、試みられ、鍛えられ、この高く聖き役職のために、3度も命を救われた。

「予言者ジョセフ・スミスの教え」に次のような言葉がある。「世の人々のために働くよう召されたすべての人々は、この世が造られる前、天上の大会議において、正にその目的のために聖任されていたのである。」（P. 365）

何度も言われてきたことであるが、予言者を召し、予言者の任を解きたものは主である。私たちは常にこのことを心にとめておかねばならない。他のいかなる力も予言者を召したり、予言者の任を解いたりすることはできない。前に指摘したように、教会の大管長が世を去ったときは、十二使徒会定員会が後を受け、前任使徒すなわち十二使徒会会長が管理者となる。

ハロルド・B・リー大管長が亡くなったときに起こった出来事は重大な意味を持つ。ロムニー副管長は病院に呼ばれ、リー大管長と話した。リー大管長は、しばらくの間その任務が遂行できなくなると考え、ロムニー副管長に言った。「タナー副管長は遠くへ行っています。私の代わりに、教会の仕事を進めていただけませんか。」その少し後、キンボール会長がやって来て、ロムニー副管長に「私にできることでしたら何でもいたしますから遠慮なくおっしゃって下さい」と言った。しか

し、そうこうするうちにリー大管長の死が告げ知らされると、今度はロムニー副管長がキンボール会長に向かって言った。「さあ、責任は十二使徒定員会の会長であるあなたに移りました。私はあなたの指示に従います。私に助けられることなら何でもしますよ。」

これこそ教会の秩序に従った全く範例であり、教会が大管長会空席のまま放置されることは決してなく、大管長会の次世代への移行がいかに円滑に行なわれるかを示す、すばらしい模範である。キンボール会長は十二使徒会会長として、時を置かず教会を管理する責任を受けた。

私はここで彼が教会の大管長として指名され聖任されたときの手順について述べたいと思う。しかしその前に、14年前の1960年4月4日に与えられたキンボール大管長の大会説教を引用したい。

「優しく幼な子を見おろしながら、その子が大管長に、あるいは国の指導者になった姿を心に描かない母親がい

るだろうか。母親は腕の中に抱かれて
いる子供が、政治家に、あるいはリー
ダーに、予言者になる姿を心に浮かべ
るものである。そしてどの夢かが現実
のものとなるのである。ある母親はシ
ェイクスピアを世に出し、またある母
親はミケランジェロを、そしてアブラ
ハム・リスカーンを、そしてある母親
はジョセフ・スミスを世に送った。

「神学者がよるめきつまずいている
とき、人々が口々に偽りを語り心の定
まらないとき、人々が主の言葉を求め
てこなたかなたへはせまわるのに、こ
れを得ないとき、また過ちが拭い去ら
れ霊的な暗黒が晴らされ、そして天が
開かれることが必要なときに、ひとり
の幼な子が生まれる。」何と予言的な
ことであろうか。（1960年4月大会報
告）

1895年3月28日、ソルトレークシテ
ィーにちょうどこのような幼な子が産
まれた。名前はスペンサー・ウーリー
・キンボールである。この偉大な人の
誕生から今日までの半世の間には、19

74年7月号の聖徒の道にボイド・K・
パッカー長老が巧みに書き表わされた
ように、非常に興味ある話がある。

ウィルフォード・ウッドラフは大管
長として在任当時、大管長の死後は時
を置かず次世代の大管長会を組織する
ことが主のみどころであると語った。
ゆえに、1973年12月30日、リー大管長
死去のわずか4日後、十二使徒定員会
のキンボール会長は大管長会の再組織
について話し合い、定められている措
置をとるために、十二使徒定員会全員
を神殿の一室に集めた。副管長であっ
たロムニー長老と私は、それぞれ十二
使徒定員会の自分の位置へ戻った。

キンボール会長はリー大管長の死去
に深い悲しみの意を表わし、自分がそ
の任に不十分であると思われる旨を述
べた後、大管長会再組織についてどの
ように感じているかを先任順に話すよ
うにと言われた。

十二使徒全員が話し終わると、彼は
今こそ大管長会を再組織する時であ
り、主は彼すなわちスペンサー・W・



キンボール会長がこの期間教会を管理するよう望んでおられると感ずる旨を表明した。愛に満ちた主のみたまがあふれんばかりに注がれ、兄弟たちの思いにも言葉にも完全な一致と調和があった。我々の望みも目的もただ主のみむねに従うことであった。だれの心にも疑問は湧かず、すでに表明された主のみむねのみが胸にあった。

その後、エズラ・タフト・ベンソン長老が、大管長会を組織し、スペンサー・W・キンボールを大管長、予言者、聖見者、啓示を受ける者、教会を預る者として支持し、聖任し、任命すべきであると正式に提議した。この提議は即座に満場一致で採択された。

キンボール会長は、謙遜に進み出て、その提議を受け入れることを表明し、それから主のみたまと祝福が彼に注がれ、主の御旨を行なうことができるようにと祈られた。彼は常にリー大管長が教会の大管長として働けるよう、健康と体力と活力と主の祝福が与えられるようにと祈っていたと語った。また彼は愛する妻カミラと共に、真心からこの責任が自分の肩に置かれることがないようにと祈り、リー大管長は自分よりも長生きされるに違いないと考えていたと特に強く語った。この時私はゲッセマネの園で祈られた救い主を思い浮かべた。「……わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい。」(マタイ26:39)そして彼はその杯を受けた。

その後、彼は第一副管長としてN・エルドン・タナーを、第二副管長としてマリオン・G・ロムニーを選んだ。私とロムニー長老はキンボール会長を教会の大管長として支持すること、全力を尽くしてそれぞれの責任を全うすることを表明し、彼の上に主の祝福があるよう祈った。

続いてベンソン長老が十二使徒評議員会会長に支持された。そしてキンボ

ール長老は部屋の中央に席を取り、全員が彼の頭に手を按いた。我々は真に主のみたまが我々と共にあり、暖かいものが胸に満ちるのを感じた。ベンソン長老のすばらしい祈りと祝福によって、スペンサー・ウーリー・キンボールは末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者、聖見者・啓示を受ける者、そして大管長として聖任され任命された。

私はすべてが教会の方法と秩序にのっとって行なわれたこと、そしてスペンサー・W・キンボールが主の予言者、主の教会、地上における主の王国の大管長であることを証する。これは皆様方に対する、そして世に対する私の証である。彼が大管長として指名されて以来、ステーク部大会において、そして本日のこの聖会において、人々は熱烈に彼を支持した。キンボール大管長を神の予言者として受け入れ支持し、神の王国の建設のために、さらに言うならば大いなる義のために、彼の指示のもとに全力を尽くして働き、世を私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの再臨に備えさせることは、私たちひとりびとりの大いなる特権であり名誉であり責任である。

しかしながら今までもそうであったように、まだ大管長の選出と手順に疑問を持つ人がいる。ある人などは自分が教会の大管長になるべきであるなどと私に書いてよこした。私は皆様に申し上げたい。今述べたような教会における手続きやイエス・キリストの教えは人間の手により審議に付されるような類のものではないことを覚えていただきたい。それは主の教会、加えて王国の会員であること、予言者を受け入れ支持するという特権と責任と祝福を伴うものである。そして私たちが教会員として、また私たちの持つ神権に対してふさわしいかを決めるのは私たち自身の問題なのである。

教会の指導者たちは主に対して責任があるということを常に心にとめておいてほしい。主は指導者たちが誤った

方向に進むとき、彼らの道を正し、彼らがその任を成し終えたとき彼らを解任したものである。我々は以前からずっと警告し続けてきた。神が教会を管理する者として権能を与えられた人に逆らい、悔い改めないならば、主はその人からみたまを取り上げられる。

兄弟たち、主のみたまの導きを受け、その祝福に浴したいと望むならば、つぶやかず、不平を言わず、欠点を捜さず、その地位には他の人が就くべきだなどと考えず、主の選びたもうた人に忠実でありなさい。三人の見証者のひとりであり、天の御使いから神権を受けたオリバー・カウドリや大管長会の一員であったシドニー・リグドンのような高い地位にあった人でさえ、神の予言者に異議を唱え、批判したために教会から脱落した。

皆様が、指導者として神が選びたもうた人を誠実に信じ、支援し、支持し、従うよう祈る。そうするとき私たちは祝福を受け、主のみたまは私たちと私たちが信仰深く活発であるようにと教え励ます私たちの家族と共にある。そして神のみ業は成し遂げられ、神のみこころが行なわれる。主は主の予言者についてこう言っておられるからである。

「そは彼の言は、汝の全き忍耐と信仰とを以て、あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。これらのことを為さば、地獄の門も汝らに打ち勝たざるべし。而して、誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い、汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。主なる神かくの如く言う。われは彼に靈感を与えて、善を為すために大いなる力を以てシオンの大事を推し進めしむ。……」(教義と聖約21:5-7)

イエス・キリストの御名によりて申し上げる。アーメン。

1973年度

統計記録

教会ユニット

ステーク部数	630
ワード部数	4,580
独立支部数	1,127
合計	5,707

伝道部数	108
支部数	1,817

教会員数

ステーク部内	2,856,210
伝道部内	465,346
合計	3,321,556

会員数の増加

幼児祝福数	68,623
子供のバプテスマ数	48,578
求道者のバプテスマ数	79,603

一般統計 (ステーク部からの資料に基づく)

出生率 (1,000人当り)	25.64
結婚率 (1,000人当り)	14.72
死亡率 (1,000人当り)	4.91

神 権

アロン神権者	
執事	104,549
教師	102,924
祭司	164,668
合計	408,141

メルケゼデク神権者

長老	280,351
七十人	24,490
大祭司	99,886

合計	404,727
----	---------

アロン神権者, メルケゼデク神権者総計	812,868
---------------------	---------

補助組織登録会員数

扶助協会	785,000
日曜学校	2,564,134
アロン神権MIA (YM)	171,377
アロン神権MIA (YW)	212,040
初等協会	471,538
メルケゼデク神権MIA	625,000

福祉計画

被援助者数	103,100
雇用者数	16,159
労働奉仕日数累計	154,306
福祉操業日数累計	4,756

系 図 協 会

神殿儀式のために処理した名前の数	2,718,421
年度内に27カ国においてマイクロフィルムに収録された系図記録は、24,287,000メートルの長さとなりこれは300頁の本で3,801,373冊に相当する。	

神 殿 の 儀 式

15の神殿で執行された儀式数	
生 者	71,555
死 者	8,836,044
合計	8,907,599

教会の学校

在籍者数 (インスティテュート, セミナリーを含む)	307,086
----------------------------	---------

教会の若人を導く神権

1974年のMIA中央大会の最終日にあたる6月23日(日曜日)の最後の集会で、キンボール大管長はアロン神権MIAの名称と組織の変更を発表した。これにより神権の持つ役割がまた新たに重要視されることとなった。

キンボール大管長は、アロン神権者ならびに同年齢(12歳から18歳)の若い女性の指導組織の変更により「さらに多くの神権者の参画と密接な指導が得られるようになるだろう」と前置きして次のように語った。私たちはこの責任を、啓示に基づいてアロン神権の会長会を構成している管理監督会に直接委譲した。」

これにより相互発達協会(MIA)という名称は廃止され若い男性の組織は「アロン神権」と呼ばれる。

キンボール大管長はさらにこう語った。「主は12歳から18歳までの若い女性のための新しい組織を啓示された。この組織は『若い女性』と呼ばれる。そして彼女たちは管理監督会から神権による指導を受けることになるだろう。」

また、アロン神権と若い女性合同の活動の夕べは、今までMIAが開かれていた夕べに行なわれることもつけ加えた。

キンボール大管長はこの新しいプログラムにおいて監督と副監督が重要な位置を占めることを強調し、監督会がアロン神権の定員会集会に限らず活動の夕べにも参加するように力説している。「この活動の場こそ、あなたがた兄弟たちがすべての時を若人と共に過ごすべきところなのである。この責任を他人に委譲することはできない。

最も大切なのは、監督が、その第一の主要な責任がワード部に集うアロン神権者と若い女性の上にあることを自覚することである。」キンボール大管長はこう語り、この点に関してステーク部長が監督を訓練する責任を持っていることも指摘した。

「私たちが意図するところは、中央でもワード部でも同じことだが、アロン神権者と監督会の間に他の人を立てないということである。もちろんステーク部長会や他の成人会員が監督会を援助することはある。

私たちが望むところは、私たちがメルケゼデク神権定員会に奮起を促しているのと同じように、アロン神権定員会にも真剣にその職務を果たして欲しいということである。

現在教会が直面している3つの重大なチャレンジは、第1に青少年が教会から離れずに信仰を保ち続けられるようにすること。第2にあらゆる国民に福音を宣べ伝えること、そして第3に積極的に教会の活動に参加しようとしていない父親に働きかけること(私たちが長老見込み会員と呼ぶ人々もこれに含まれる)である。この3つのチャレンジは互いに交錯

しあっている。教会に来ていない青少年で、父親がやはり教会に活発に参加していないというケースがかなりあるからである。

不活発と無関心のサイクルは父親から息子へと循環するサイクルである。そして今こそ教会が一斉にこのサイクルを打ち壊さなければならない。私たちはさらに多くのアロン神権を持つ若者に手を差し伸べ、彼らを支えるべきである。そして彼らが伝道に召され、神殿で結婚するにふさわしくなるように助けなければならない。それと同時に、さらに多くの父親、将来のメルケゼデク神権者にも手を差し伸べ、支えなければならないのである。この父親と若人との間の無関心と不活発のサイクルがもたらす弊害のひとつは、独身の姉妹の数が増加するということである。その中には勇敢で忠実な姉妹も多くいる。

私たちは、福音が真実であることを生活に応用することによって知る必要がある。友のために、また神のために働くときに、私たちはまさにその努力と行為により、さらに忠実で清い状態に保たれるのである。

もし教会の大々的な飛躍を望むならば、家庭は言うに及ばず、アロン神権定員会やメルケゼデク神権定員会、そして女性のプログラムにおいて、教会員に福音を生活に取り入れるよう教えなければならないのである。

もし私たちがメルケゼデク神権者やその見込み会員、またアロン神権者や若い女性に対するチャレンジに同時に応えることができるならば、私たちの家庭には愛とやすらぎがもたらされ、そこで私たちは一人一人に備えをさせ、やがて全世界に福音をもたらし、神殿で結婚し、立派な家庭を築くように導くことができるのである。」

ピクター・L・ブラウン管理監督は、アロン神権MIAにおける変更に関して、次のように詳細にわたり説明している。

「リー大管長は、教会に対してアロン神権MIAを提起した際、終局的には全体の組織機構から考えて何がしかの変更を加える必要があることを示唆した。それが今、靈感を受けた指導者スペンサー・W・キンボールのもとに、青少年の組織内での調整という形で現われてきたのである。この調整により責任と権能の経路は短縮され、また判然としなかった部分もなくなり、12歳から18歳までの全青少年に対する責任が監督の双肩にかかることとなった。

私たちはこのプログラムが何ら新しいものではないことを認識すべきである。強調したいのは、プログラムには全く変更がないし、ステーク部およびワード部の段階での組織の変

更も最小限で、また現在使用しているテキストや指導方法も以前のものをそのまま使用することができるということである。

さらにこのプログラムに参加する人々も変わりなく、指導者の責任の内容も現状のままであり、ただひとつキンボール大管長が中央アロン神権MIAの再組織のときに提示したように、名称のみが変更される。

新しい名称は『アロン神権』と『若い女性』であり、MIAとは呼ばず、「アロン神権と若い女性の活動の夕べ」と呼ぶことになる。

またこの活動の夕べに関する責任の変更はない。

さて、アロン神権と若い女性の中央の組織を見てみよう。この新しい機構は管理監督会によって管理される。主は管理監督会をアロン神権の会長会と称された。

さらに大管長会により、12歳から18歳までの若い女性に対

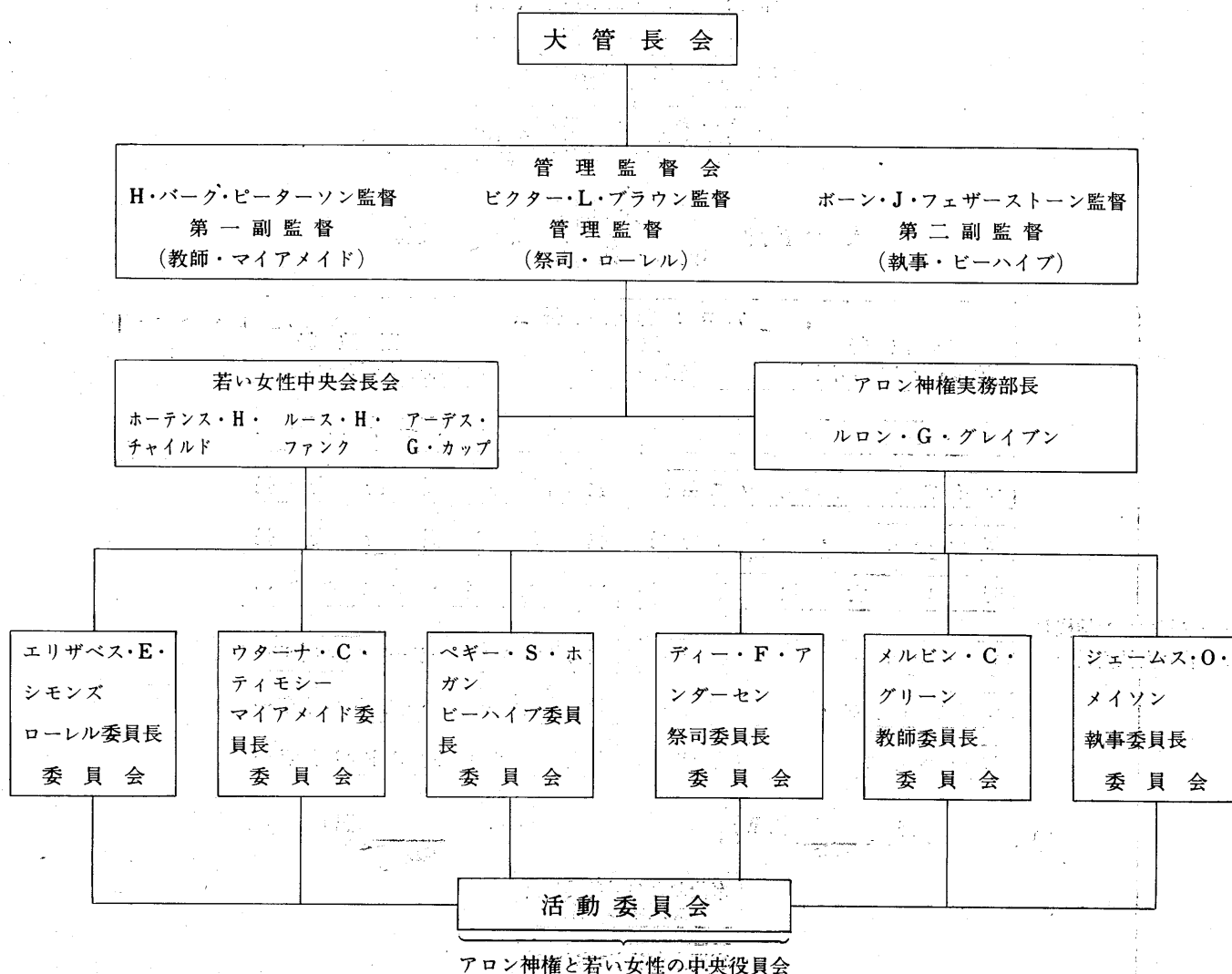
する責任も管理監督会はアロン神権の会長会として、アロン神権者と、同年齢の少女たちとを管理することになる。

アロン神権の中央組織は、管理監督会、専任の召しを受けて働くアロン神権実務部長、ならびに以前の中央管理会と同じ機能を果たす。神権指導者による委員会とによって構成される。

若い女性の組織は、本質的には以前と同じ状態で存在する。そして従来の指導者は若い女性の委員会として活動することになる。

若い女性の会長会は管理監督会から神権による管理を受ける。」

以上の変更は、ヤングアダルトやスペシャルインタレストのためのメルケゼデク神権MIAに対して何ら影響を及ぼさないものである。



ステーク部 アロン神権 若い女性 組織

ステーク部長会
副ステーク部長 ステーク部長 副ステーク部長
ステーク部長はステーク部アロン神権および若い女性委員会の委員長、副ステーク部長は副委員長となる。

若い女性ディレクター

高等評議員ディレクター

ローレル・アドバイザー

高等評議員
祭司(エクスプローラー)アドバイザー

マイアメイド・アドバイザー

高等評議員
教師(ベンチャラー)アドバイザー

ビーハイブ・アドバイザー

高等評議員
執事(スカウト)アドバイザー

書記(YW)

書記
ステーク部書記補助

奉仕および活動委員会
(最高3名)

専門家(必要に応じて)

ステーク部青少年委員会
(必要に応じて青少年の代表者)

ステーク部アロン神権
および若い女性委員会

ワード部 アロン神権 若い女性 組織

アロン神権会長会
副監督 監督 副監督
(教師・マイアメイド) (祭司・ローレル) (執事・ビーハイブ)

ローレル・クラス会長

祭司グループリーダー

マイアメイド・クラス会長

教師定員会会長

ビーハイブ・クラス会長

執事定員会会長

若い女性会長

アロン神権ディレクター

ローレル・アドバイザー

祭司(エクスプローラー)アドバイザー

マイアメイド・アドバイザー

教師(ベンチャラー)アドバイザー

ビーハイブ・アドバイザー

執事(スカウト)アドバイザー

書記(YW)

書記

奉仕および活動委員会
(最高3名)

専門家(必要に応じて)

監督の青少年委員会

ワード部アロン神権
および若い女性委員会

東京地域総大会開催決定

世界各地で開催されてきた地域総大会が、来年8月、東京で行なわれることになった。東洋では初めて開かれるものである。大管長会の発表によると、日程は8月8日(金)から10日(日)の3日間、大管長会管理により、十二使徒評議員会をはじめ他の教会幹部臨席のもとで行なわれる。現在日本には、ステーキ部、伝道部合わせて2万2千余名の教会員が登録されている。

この日本での大会を終えた後、幹部一行はその足で韓国のソウルに飛び、8月15、16、17の3日間、アジアで2番目の地域総大会を開催することになっている。現在韓国には1ステーキ部、1伝道部があり、8千余名の教会員が在住している。

地域総大会が開催される理由として、リー大管長は昨年開かれたミュンヘン大会において次のように宣べている。

「なぜこのような地域総大会を開くのかと思う方もおいでであろう。私たちは教会員が全世界に増えているため、多くの遠隔地へ出かけて行くことを計画したのである。わ

ずか一握りの教会員が、143年経った今日、300万を越える数に達し、世界の78カ国に住み、語る言葉は17カ国語となっている。

私たちがこれらの各地域を訪れる目的は、ソルトレークシティーで開催されている総大会に出席できるよりもさらに多くの会員が共に集っていただきたいからである。」(聖徒の道、1974年7月号)

「……バプテスマを受けて教会の門をくぐった人々は、聖徒の群れの集うところにわが身をおきたいと願う。それも特に、神殿で経験する祝福をはじめ、教会が提供してくれる祝福をあますことなく受けられる場に、立ちたいと望むのである。民のこの切なる願いを目にした私たちは、民のもとに行き、地域総大会を開くことを考慮したのである。私たちは今ここで、地元の指導者と会い、各国の実情をつぶさに見ることができる。教会本部にただとどまっていたは得られないつながりを、今この大会で得ることができるのである。」(ニューエラ1974年8月号)

東京地域総大会の予定

8月8日(金)夜……………活動と社交プログラム
9月(土)午前及び午後…一般大会
夜……………特別部会
10日(日)午前及び午後…一般大会

過去に開かれた、また今後予定されている地域総大会

1971年	8月27日～29日	マンチェスター(英国)
1972年	8月25日～27日	メキシコシティー(メキシコ)
1973年	8月25日～27日	ミュンヘン(西ドイツ)
1974年	8月16日～18日	ストックホルム(スウェーデン)
1975年	2月28日～3月2日	サンパウロ(ブラジル)
	3月7日～9日	ブエノスアイレス(アルゼンチン)
	8月8日～10日	東京(日本)
	8月15日～17日	ソウル(韓国)

この大会を管理するためにスペンサー・W・キンボール大管長をはじめとして、大管長会、十二使徒など多数の教会幹部が来日することになるが、大会が開催される3日間、主に近く仕える予言者たちのみたまにあふれた言葉を聞き、共に時を過すという特権に浴することができるのである。

主は言われた。

「まことに主なる神はそのしもべである予言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない。」(アモス3:7)

「この故に汝ら教会員は、彼が上より受くるままに汝らに与うる誠命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き、わが前に全く聖き道を履むべきなり。……あたかもわが口より聞

くが如くにこれを受け入るべきなり。これらのことを為さば、地獄の門も汝らに打勝たざるべし、而して、誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い、汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。」(教義と聖約21:4, 5)

「およそ聖霊に感じたる時語るところはことごとく聖典の言となり、主の意となり、主の精神となり、主の言となり、主の声となり、世を救いに導く神の力となるべし。」(教義と聖約68:4)

日本の聖徒に語りかけられる主の予言者たち。その祝福をあますことなく享受できるよう、今からの十分な備えが私たちひとりひとりに期待されているといえよう。

